

骨寺村莊園遺跡確認調査報告書

平泉野遺跡

平成30年3月

一関市教育委員会

骨寺村莊園遺跡確認調査報告書

平泉野遺跡

平成30年3月

一関市教育委員会

序

一関市巖美町本寺地区は、中尊寺に残される『陸奥国骨寺村絵図』の現地として著名であり、「日本の原風景」ともいえる農村景観を今に伝えています。平安時代以来、中尊寺きょうぞう経蔵しやうえんの荘園であったことが、中尊寺の古文書群や鎌倉幕府が編纂した歴史書『吾妻鏡』あづまかがみによって証明されています。平成17年には国史跡「骨寺村荘園遺跡」に指定、18年には「一関本寺の農村景観」として国の重要文化的景観に選定されています。

さて、骨寺村荘園遺跡と深い関係にある「平泉」は、23年6月に世界文化遺産に登録されました。世界遺産への拡張登録を目指している「骨寺村荘園遺跡」については、24年度に世界遺産暫定一覧表に登載され、教育委員会では重点的に調査研究を行っています。

本年度は、27年度から継続している「平泉野遺跡」へいせんのいせきの確認調査を実施しました。本書により調査成果を広く公開し、市民ならびに全国の方々にも当市の文化財を知っていただき、関心が高まることを期待しています。また、地域のルーツを紐解いていくことが、より良い地域づくりの一助になれば望外の喜びです。

最後に、調査に際しては地権者、地域住民の皆さまをはじめ多くの方々のご協力を頂きました。衷心より感謝を申し上げます。

平成30年3月

一関市教育委員会

教育長 小 菅 正 晴



国指定重要文化財『陸奥国骨寺村絵図』詳細図（複製） 原典は中尊寺蔵



国指定重要文化財『陸奥国骨寺村絵図』簡略図（複製） 原典は中尊寺蔵



国指定重要文化財『陸奥国骨寺村絵図』紙背図（複製） 原典は中尊寺蔵



1 トレンチ道路遺構1 確認状況



3 トレンチ縦穴状遺構1 全景

例 言

- 1 本書は、一関市教育委員会が平成29年度に実施した骨寺村荘園遺跡に係る調査報告書である。
- 2 調査は国庫補助事業及び県補助事業を活用した。
- 3 調査は、平成7年に国の重要文化財に指定された『陸奥国骨寺村絵図』（中尊寺蔵）の現地として、一関市巖美町本寺地区に所在する国指定史跡骨寺村荘園遺跡の範囲及び内容の確認のための発掘調査を実施したものである。
- 4 29年度調査対象地は、骨寺村荘園遺跡の構成要素である「白山社及び駒形根神社」の西側に隣接する「平泉野遺跡」である。
- 5 調査主体は、一関市教育委員会 教育長 小菅正晴であり、現地調査は文化財課が担当した。
- 6 調査体制は以下のとおり。

教育委員会	文化財課	課長	佐藤 武 生
		文化財係長	坂 本 光 司
		学芸員	菅 原 孝 明
		文化財調査研究員	二階堂 里 絵
		期限付臨時職員	菅 原 友 明
- 7 本書の作成は文化財課が行い、担当箇所の文末に執筆者名を付した。編集は二階堂が行った。
- 8 土層断面図の土色表示は新版標準土色帳1997年度版（日本色研事業株式会社）を用いている。
- 9 調査補助及び調査区刈り払い業務は本寺地区地域づくり推進協議会に、無人航空機（UAV、通称ドローン）による遺構の空中撮影は株式会社一測設計に、自然科学分析に係る業務は株式会社加速器分析研究所に、それぞれ委託した。
- 10 報告書作成にあたっては、一関市骨寺村荘園遺跡指導委員会及び同世界遺産推進部会、岩手県教育委員会平泉遺跡群調査整備指導委員会の指導と助言を得ている。また、出土した近世磁器の鑑定については、羽柴直人氏（公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター）の、縄文・弥生土器の鑑定については、岩田貴之氏（北上市教育委員会）、君島武史氏（北上市教育委員会）の指導を頂いた。
- 11 調査協力者・機関（敬称略・順不同）
小巖芳夫、佐々木源輔、佐々木登志也、佐藤勲、佐藤金朗、佐藤弘征、山川純一、本寺地区地域づくり推進協議会、骨寺村ガイドス運営協議会、文化庁、岩手県教育委員会、平泉町教育委員会、奥州市教育委員会
- 12 本書に係る調査報告会は、平成30年2月10日に骨寺村荘園交流館（若神子亭）で実施した。

目 次

序	1
カラー図版	3
例言	7
目次	8
1 位置と環境	9
2 調査に至る経緯	14
3 平泉野遺跡（中川9、若井原194-1地点）の調査	21
4 平泉野遺跡（中川9、若井原194-1地点）に係る火山灰分析	34
5 平泉野遺跡（中川9、若井原194-1地点）に係る放射性炭素年代測定（AMS法）	38
6 まとめ	49
遺物観察表	51
写真図版	52

1 位置と環境

1 一関市の位置と環境

一関市は、岩手県の南端に位置する。平成17年（2005）9月20日に一関市、花泉町、大東町、千厩町、東山町、室根村、川崎村の7市町村が合併、さらに23年（2011）9月26日に藤沢町と合併した。東西に約63km、南北に約46kmの広がりを見せる市の総面積は1256.42km²である。

中央部を北上川が南流する市域は、西側に奥羽山脈、東側に北上山地がある緑豊かな農山村である。著名な記念物は、コニーデ型二重火山である栗駒山（須川岳）を中心とする火山性山岳風景地の国指定「栗駒国定公園」（昭和43年（1968））や北上川水系磐井川流域の国指定史跡「骨寺村荘園遺跡」（平成17年）および国選定重要文化的景観「一関本寺の農村景観」（平成18年（2006））、下流部には磐井川によって滝或いは急流、深淵となって変化に富んだ溪谷景観をなす国指定名勝及び天然記念物「巖美溪」（昭和2年（1927））がある。市の東側には同じ北上川水系の砂鉄川流域に、古生代の石灰岩層が浸食されてできた国指定名勝「狛鼻溪」（大正14年（1925））がある。

2 骨寺村荘園遺跡の位置と環境

骨寺村荘園遺跡は須川岳を見上げる中山間地にある。遺跡のある一関市巖美町本寺地区は、中尊寺に残される『陸奥国骨寺村絵図』の現地として、中世以来の農村景観を良好に継承した地域で、須川岳から流れ出る磐井川の左岸に形成された小盆地に集落が点在する。平地部分の平均海拔高は約160m、南側を磐井川に接し、三方は海拔230m～260mの丘陵に囲まれている。

骨寺村荘園遺跡を取り巻く自然環境については、骨寺村荘園遺跡村落調査研究の一環である自然班（総括：広田純一（岩手大学教授））による一連の研究成果がある。地形・地質を担当した土井宣夫によると、磐井川に沿う地形の特徴は、須川岳北斜面から北上川へ合流する間に、いくつもの狭窄地による数珠状の小盆地が形成されている点にある。磐井川の流域には硬質の巖美層が広がる。この層は褶曲により磐井川の下底と河岸に交互に出現するため、下底（縦方向）と河岸（横方向）への浸食速度に差異が生じて、数珠状の小盆地が形成されたとしている。また、巖美層が交互に出現する理由は、断層活動により巖美層に褶曲が生じているためであるという（土井2012）。このようにして形成された小盆地の一つに骨寺村荘園遺跡は所在する。

現在の植生について、気候と植物・植生を担当した島田直明は、北側丘陵部にはコナラやクリの広葉樹が広がり、斜面下部には植林によるスギ林、上部の尾根にはアカマツやゴヨウマツ林が分布するとしている。一部にはブナ林も確認できたという。植物相からは日本海型要素と太平洋・温暖帯要素の両方のタイプが見られ、岩手県内陸部の中山間地としての地勢を反映している（島田2012）。それと関連して、磐井川左岸の旧河道地を対象に花粉分析を行った平塚明らは、915年に降下した十和田a火山灰の上層からイネ花粉が急増することを指摘しており、この時期に水田に生息する水生植物（オモダカ・サジオモダカ属）の増加から、本格的な稲作が始まったことを想定している。同時期にクリの花粉、アサヤソバの花粉も増加している。また、堆積速度から14世紀以降にはスギやマツ林の拡大が推定されている（平塚他2012）。ただし、十和田a火山灰の降下以降に上記の傾向が認められるとしても、土層堆積が継続的かつ安定的であったかが検討課題となる。年代についても、やはり発掘成果との突合が不可欠である。

3 歴史的環境

中尊寺文書 骨寺村の中尊寺莊園としての始まりを示す文書は、『中尊寺文書』の一つ「中尊寺経蔵別当補任状案」である。そこには自在房蓮光じざいぼうれんこうという僧侶が、紺紙金銀字交書一切経こんしきんぎんじこうしよいつさいきょうを奉行し、8年をかけて完成させたこと、その功により蓮光は中尊寺経蔵別当に就任したこと、そして蓮光の「往古私領」であった「骨寺」を経蔵に寄進し、永代にわたって経蔵別当領としたことが記されている。日付は天治三年（1126）三月二十五日、発給者は藤原清衡である。

『中尊寺文書』には、骨寺村の伝領に関する譲状・補任状・安堵状が多数あり、室町時代まで経蔵別当領として相伝されていることが確認できる。その他、村の内部構造に関する文書として、「骨寺村所出物日記」（文保2年（1318）3月）・「骨寺村在家日記」（室町時代か）があり、貢納者と品目が書き出されている。

吾妻鏡 文治五年（1189）の奥州合戦で奥州藤原氏は滅亡し、中尊寺は庇護者を失うこととなった。『吾妻鏡』文治五年九月十日条には、中尊寺経蔵別当心蓮あんどんは所領の安堵を求め、源頼朝の宿所に参上したことが記されている。

心蓮は頼朝に対し、「中尊寺は清衡が建立したこと」「鳥羽院の祈願所となったこと」「蓮光から寺領の寄付を受け、それを御祈祷料に充当していること」「経蔵は紺紙金銀字交書一切経を納めている霊場であること」を述べている。その上で、中尊寺の存続と、合戦により住民が逃げ出した寺領の安堵を求めている。

これに対し頼朝は、経蔵別当領の一つ骨寺村の四至（村境）を定め、その上で、諸役免除の文書を下した。定められた四至は、東は鑑懸かぎかけ、西は山王窟さんのうのいわや、南は磐井川みたけどう、北は峯山堂まさか（から）馬坂である。

陸奥国骨寺村絵図 中尊寺大長寿院には2枚の絵図が残されている。簡略絵図（仏神絵図）と呼ばれるもの（カラー図版1）、詳細絵図（在家絵図）と呼ばれるもの（カラー図版2）である。また、詳細絵図の裏にも絵図があり、紙背絵図（カラー図版3）と呼ばれている。簡略絵図と詳細絵図は西を天（上）に、山稜部に囲まれた村落景観が描かれている。絵図の描写範囲は、『吾妻鏡』文治五年九月十日条に記された村の四至とほぼ同じである。つまり、頼朝によって定められた村の範囲が描かれている。

紙背絵図は、詳細絵図の裏側に描かれたもので、絵図の他に「骨寺絵図案」「寺領□□境論」「具書」等の文字も確認されている。

これらの絵図の作成目的は、中尊寺による村支配のための資料とする説（伊藤1957・吉田2008）と裁判の証拠書類説（大石1984）が示されてきたが、紙裏絵図と文字が発見されたことにより（黒田1995）、所領争いの裁判書類であることが有力となった。そしてその作成時期は簡略絵図が鎌倉時代中期、詳細絵図が鎌倉時代後期にそれぞれ作成されたと推定されている。

磐井郡西岩井村絵図（元禄十二年（1699）） 磐井郡のうち西岩井24カ村を描いたもので、そのうち五串村いづくしの中に「本寺」という文字が見える。これはもとの骨寺村であり、この時すでに、「骨寺」は「本寺」と呼ばれるようになっていたことがわかる。

平泉雑記（安永二年（1773）） 平泉に関する文献の調査・掲載と考証、現地踏査や伝承を収録したもので、骨寺村は「骨寺」の項で紹介されている。「本寺」の地に骨寺という寺があったが今はなく、「骨」が「本」に変わった時期は不明、としている。

風土記御用書出（安永四年（1775）） 仙台藩が領内の各村から提出させた書出である。その一つである五串村の書出に、本寺は「端郷本寺はごうほんでら」として記載され、名所や旧跡等がその由来とともに細かく書き出されている。その中には『陸奥国骨寺村絵図』や『中尊寺文書』の「骨寺村在家日記」にある

「六所明神、小名 若神子」、^{わかみ こ}「山王社、小名 山王山」、^{ふどうのいわや}「不動窟、小名 真坂」の別当が中尊寺の北本坊、西谷坊、小前沢坊であるとしている。西谷坊は経蔵別当職を世襲する大長寿院である。また、中尊寺の書出である「関山風土記」には、^{かんざん ふ ど き}慈恵塚が中尊寺一山の惣持である（保持されている）ことが記されている。これらの記載から、本寺（骨寺）が中尊寺の荘園ではなくなった後も、形を変えて関わりが続いていることがわかる。

4 骨寺村荘園遺跡の発掘調査成果

骨寺村荘園遺跡からは、縄文時代中期から弥生時代中期までの土器や石器が出土している。21年度調査で逆茂木が残る^{おとしあな}陥穴を、22・23年度で楕円形の^{おとしあな}陥穴を確認している。これらは駒形根神社西方の平泉野台地で発見しており、当該地は狩り場として機能していたことが想定される。また、不動窟でも縄文土器が出土しており、遺跡は丘陵部全体に分布するものと推定できる。

28年度調査では、平泉野台地南東部で縄文時代中期中葉の堅穴住居、土坑、ピット群からなる比較的規模の大きい集落を確認した。また、29年度調査では、平泉野台地北西部で自然堆積層中から縄文時代中期、晩期、弥生時代初頭の土器片が出土した。

不動窟では、縄文時代前期と弥生時代中期の土器が出土しているが、窟が利用されていたことを推定するまでには至っていない。その後、しばらくの間、村の様相を示す考古資料は見られない。

次に確認できるのは、9世紀後半ごろの^{はじき す え き}土師器や須恵器である。21年度調査では、平泉野台地から9世紀後半ごろの内面黒色処理された土師器壺や須恵器が出土している。同時期とみられる土師器と須恵器は、24年度調査（景観保全農地整備事業に伴う緊急発掘調査）でも出土している。さらに、味ヶ沢でも同時期の須恵器片が採集されており、どうやらこのあたりから村の開発が行われたようである。ただし、遺構との関係は依然として明確ではない。

12世紀に中尊寺経蔵別当領となったことと関係する調査成果もある。^{とおにし}遠西遺跡からは、12世紀の^{とこなめようさんさんきん こ}常滑窯産三筋壺と13世紀と推定される底部糸切りの小型かわらけが出土している。梅木田遺跡からは、遺構外ではあるが13世紀中頃～後半の^{りゅうせんようけいせいじしのぎれんべんもんわん}龍泉窯系青磁 鎬蓮弁文碗が出土している。これら在家に関わる痕跡は本寺地区の北側丘陵部の裾部に分布し、絵図に描かれた散居形態をよく反映している。現在も山裾には屋敷が建ち並び、中世以来の景観を継承している。

さて、北側丘陵部東端に慈恵塚がある。22年度調査では塚本体および周辺の精査を行った。直径は約10m、最大高は約2.2mで、同心円状に溝と土塁を伴うことが判明した。この形態は北東北特有の巨大経塚と酷似（関根2009）しており、村を見下ろす立地からも経塚である可能性が高い。^{おおほりそうま}大堀相馬窯産の土瓶や瀬戸窯産の^{せ と しようさん どうみょうぐ}燈明具など近世以降の遺物が出土している。

周辺の慈恵大師に関わる石造物は近世後期に建てられたものである。地誌類の整理から、塚が慈恵大師伝承と結びついたのは『^{ほうない ふ ど き}封内風土記』（1772）以降であることが推定できる。つまり、塚は近世後期に「慈恵塚」と称され、再顕彰されたものと推定できる。ちなみに絵図に描かれた「慈恵柄（塚）」やその図像は後筆であることが指摘されている（大石1984）が、後筆の時期も再顕彰された後であることが推定できる。

23年度には不動窟を調査した。窟は最大高約3m、奥行き約13mの自然洞窟である。壁面に燈明具を置くための穴が、入口部には貫を通した痕跡が見つかった。おそらくある時期において扉等で窟内部を閉塞し、燈明を灯した痕跡であると考えられる。

他の調査成果としては、梅木田遺跡でも掘立柱建物を確認しているが、陶磁器類も出土している。遠西遺跡でも近世と考えられる掘立柱建物が検出されているが、出土遺物が少ないため、年代の推定

が困難である。

以上のことから、骨寺村荘園遺跡は弥生時代以降の一時期を除き、縄文時代から現代まで人々が生活を営んでいた場所であることが想定できる。

(一関市教育委員会2015『骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』「1. 位置と環境」を引用、加筆)



若神子社と田植えを終えた水田

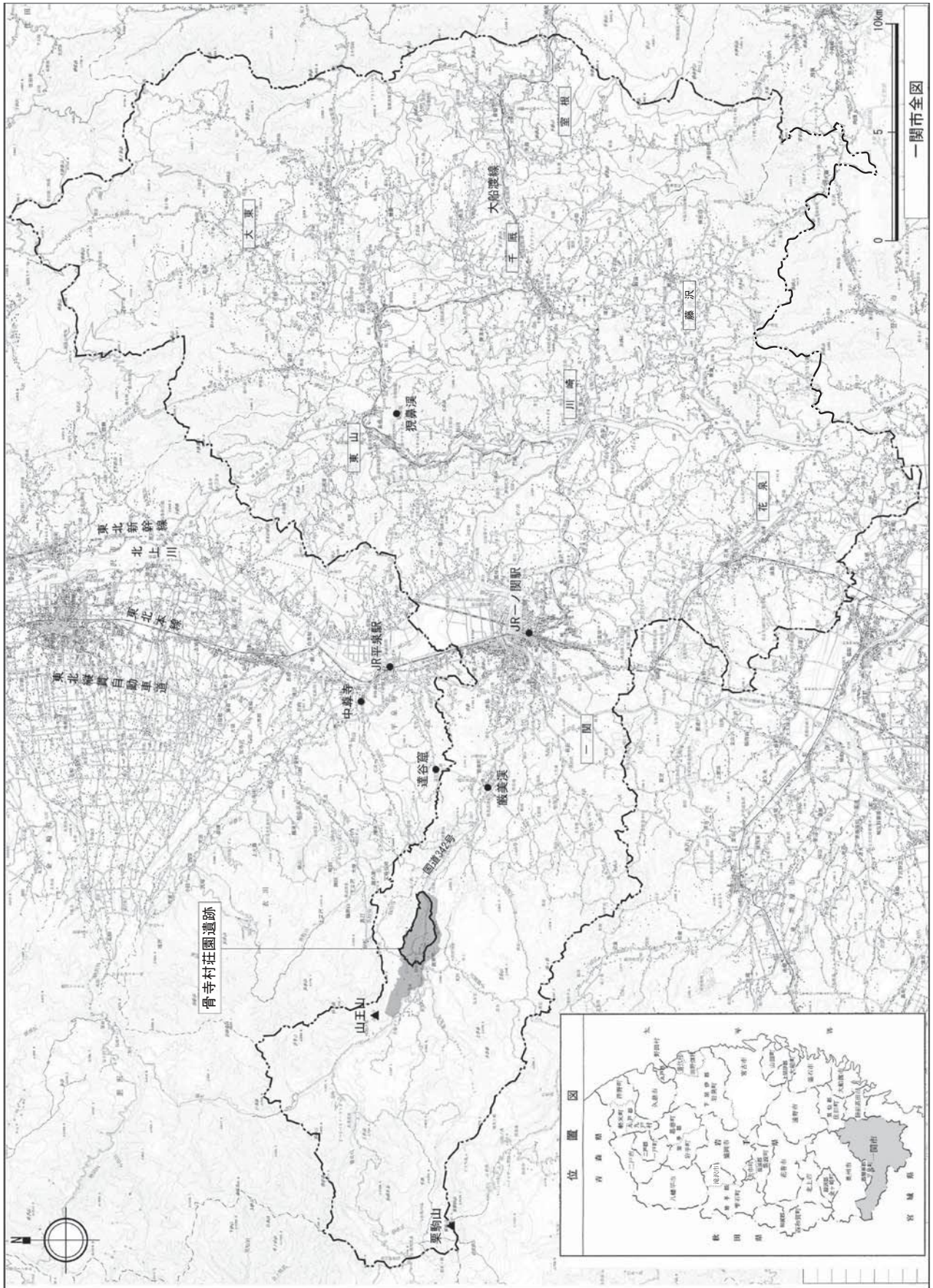


图1 骨寺村荘園位置图

2 調査に至る経緯

1 骨寺村荘園遺跡に係るこれまでの取り組み

平成5年2月	本寺地区全住民を会員とする美しい本寺推進本部発足、伝骨寺跡を調査
平成7年4月	『陸奥国骨寺村絵図』が国指定重要文化財となる
平成7年度	陸奥国骨寺村調査委員会（委員長、東北学院大学教授大石直正氏）発足、歴史地理・民俗、地方文書、石造物の調査部会
平成8～10年度	骨寺村荘園総合調査 一関市教育委員会主体の調査開始、1/2000ベースマップを作成
平成11年度	中屋敷遺跡確認調査、総柱の掘立柱建物確認、用途不明の金属製品出土
平成12年度	梅木田遺跡確認調査、掘立柱建物確認 中世骨寺村荘園遺跡整備委員会、圃場整備と遺跡保存について調整を検討
平成13年度	遠西遺跡確認調査、掘立柱建物跡、かわらけ片、常滑三筋壺片出土 中世骨寺村荘園遺跡整備委員会、整備と保存の方向について答申、「骨寺村荘園遺跡」の景観保全型の整備を提案、史跡と営農の調和を図り、文化財を活かした地域づくりの方向性を示す
平成14年度	遠西遺跡確認調査、掘立柱建物確認
平成15年度	荘園遺跡属性確認調査
平成15年6月	骨寺村荘園遺跡が「平泉の文化遺産」の資産に追加
平成15年8月	骨寺村荘園遺跡調査整備指導委員会が設置される
平成16年3月	本寺地区地域づくり推進協議会発足、景観保全・活用、世界遺産登録に向け、集落営農、圃場整備等の課題に取り組む
平成16年度	若神子社周辺の確認調査
平成17年3月2日	骨寺村荘園遺跡の国史跡指定が告示される 文部科学省告示第22号 (山王窟、白山社及び駒形根神社、梅木田遺跡、伝ミタケ堂跡、遠西遺跡、要害館跡、若神子社、不動窟、慈恵塚及び大師堂（拝殿）)
平成17年度	平泉野遺跡確認調査、縄文時代の石器出土
平成18年度	駒形根神社境内確認調査、字若神子東端の確認調査
平成18年7月28日	本寺地区の平野部を中心とした約337.5haが重要文化的景観に選定 文部科学省告示第121号
平成18年9月14日	政府が「平泉の文化遺産」を世界文化遺産へ推薦することを決定、世界遺産条約関係省庁連絡会議
平成18年12月26日	「平泉の文化遺産」の名称を「平泉一浄土世界を基調とする文化的景観」とした世界文化遺産登録推薦書をユネスコ世界遺産センターに提出
平成19年度	駒形151-1、153-1 確認調査、縄文土器片、石器等出土
平成19年8月26～30日	イコモスが現地調査
平成20年5月	イコモス「登録延期」勧告
平成20年6月14日	岩手・宮城内陸地震（マグニチュード7.2）発生。震源地は本寺地区の西方約3km

平成20年7月	世界遺産委員会で「平泉—浄土世界を基調とする文化的景観」の登録延期が決定
平成21年度	平泉野遺跡（若井原188地点ほか）確認調査、縄文土器、石器剥片、陥穴、9世紀代の須恵器と土師器が出土
平成21年4月4日	国際専門家会議、推薦書作成委員会において、平成23年の世界遺産登録を目指す資産の絞り込みが提案され、世界遺産登録後の対応資産として、骨寺村荘園遺跡、長者ヶ原廃寺跡、白鳥館遺跡、達谷窟の4資産が調査の進展により段階的に拡張登録を目指す方針を確認
平成22年1月	「平泉の文化遺産」の名称を「平泉—仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」とした世界文化遺産推薦書をユネスコ世界文化遺産センターに提出
平成22年度	慈恵塚現状確認調査、精査及び三次元測量の実施、近世地誌類と出土遺物、石造物整理から慈恵大師伝承と古塚が結びついたのは近世後期と推定 平泉野遺跡（若井原194-1地点）確認調査、縄文時代の焚火跡を確認
平成22年9月8・9日	イコモス現地調査、調査員ワン・リジュン氏（中国イコモス国内委員）
平成23年3月11日	14時46分頃 マグニチュード9.0の巨大地震発生（震災名：東日本大震災）
平成23年度	不動窟確認調査、精査及び三次元測量の実施、貫痕と燈明台の痕跡を確認 白山社及び駒形根神社確認調査、縄文時代の陥穴を確認
平成23年5月	イコモス「登録」勧告
平成23年6月29日	世界遺産委員会で「平泉—仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」の登録が決定 但し、柳之御所遺跡を除く
平成23年11月14日	第1回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成24年3月22日	第2回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成24年度	白山社及び駒形根神社確認調査、縄文時代の陥穴 伝ミタケ堂確認調査、自然決壊による崩落岩盤確認 不動窟確認調査、基盤層とみられる自然堆積層確認
平成24年5月18日	第3回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成24年9月25日	骨寺村荘園遺跡を含む「平泉—仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群（拡張）」が世界文化遺産暫定一覧表に記載
平成24年10月26日	「平泉の文化遺産」拡張登録に関係者（県教育長、二市一町首長）会議 開催 拡張登録に係る方針と調査計画を合意
平成25年1月30日	第4回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成25年度	伝ミタケ堂跡確認調査、遺構・遺物ともに発見されず 不動窟確認調査、窟前面に3基の柱穴を確認 白山社及び駒形根神社（中川6地点）確認調査、土地造成と掘立柱建物を確認 梅木田遺跡確認調査、13世紀とみられる龍泉窯系青磁碗鎊蓮弁文碗片出土
平成25年11月22・23日	平成25年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会 開催
平成26年1月7日	第5回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成26年度	白山社及び駒形根神社（中川4、6地点）確認調査、中川4地点の塚の自然

	科学分析を実施
	梅木田遺跡確認調査、近世中後期の遺構変遷を推定
平成26年11月29・30日	平成26年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会 開催
平成27年1月6日	第6回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成27年1月26日	本寺地区の一部6.7haが重要文化的景観に追加選定 文部科学省告示第6号
平成27年度	白山社及び駒形根神社（中川6地点）確認調査、平場の造成時期を17世紀以降と結論付け
	梅木田遺跡確認調査、17世紀以降の掘立柱建物を確認
	平泉野遺跡（若井原194-115地点）確認調査、17世紀以降の段切り造成区画を確認
平成27年11月14・15日	平成27年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会 開催
平成28年1月5日	第7回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成28年度	梅木田遺跡確認調査、掘立柱建物を確認
	白山社及び駒形根神社（駒形5、若井原194-1地点）確認調査、縄文土器、住居跡を確認
	平泉野遺跡（中川9、若井原194-115地点）確認調査、35m以上の溝を確認、塚の構築年代を16世紀以降と結論付け
	山王窟三次元測量
平成28年8月4～6日	平泉の文化遺産世界遺産拡張登録委員と海外専門家との意見交換会 開催 （第8回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会と位置付け）
平成28年10月3日	第9回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成28年12月3・4日	平成28年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会 開催
平成29年1月12日	第10回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成29年度	平泉野遺跡（中川9、若井原194-1地点）確認調査
平成29年6月22日	第11回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成29年8月5日	「平泉の文化遺産」国際会議 開催（平成29年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会と位置付け）
平成29年8月6日	第2回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録委員と海外専門家との意見交換会 開催（第12回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会と位置付け）
平成29年9月8日	第13回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催

2 平成29年度調査に至る経緯

一関市教育委員会は、平成8年度から骨寺村荘園遺跡の調査に着手し、11年度から発掘調査を継続して実施している。目的は、『陸奥国骨寺村絵図』の現地である本寺地区の絵図に描かれた田圃、在家、宗教施設の痕跡を確認することである。

調査の結果、本寺地区北側の山裾には在家とみられる遺構が多く、その一部から中世の遺物が出土した。そのことは、遺構の時代も中世まで遡ることを示唆している。一方、宗教施設の調査については、中世に遡る遺構・遺物の発見には至っていない。村落遺跡としての把握は進んでいるものの、宗教施設の調査では明確な成果を挙げられていないのが現状である。

市教育委員会は、15年度から骨寺村荘園遺跡を平泉の文化遺産の一つとして世界文化遺産への登録

を推進してきた。しかし、20年に平泉は登録延期となったため、21年に登録推進の資産候補の絞り込みが提案された。そして、骨寺村荘園遺跡は更なる調査研究が必要と判断され、資産候補から外れ拡張登録を目指すことになったのである。

そのため、市教育委員会は7カ年の発掘調査計画を立て、特に宗教施設に関わる調査を中心に実施してきた。そうした中、23年に「平泉—仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」が世界文化遺産に登録され、翌24年には、骨寺村荘園遺跡のほか、柳之御所遺跡（平泉町）、達谷窟（平泉町）、白鳥館遺跡（奥州市）、長者ヶ原廃寺跡（奥州市）の5つ拡張予定資産が世界文化遺産暫定一覧表に記載された。

これを受け、拡張登録を目指す関係区市町間で5カ年の重点調査を実施することを確認した。拡張登録につながる考古学的成果を積み重ねることが求められているのである。

29年度は、21年度からの発掘調査計画を改定した第2期計画（29～33年度）の1年目にあたり、また区市町で取り決めた5カ年の重点調査の最終年度にあたる。昨年度に引き続き平泉野遺跡の確認調査を実施している。

これまで（11～29年度）調査した地点を図2-1、図2-2、表1に示した。

（菅原）

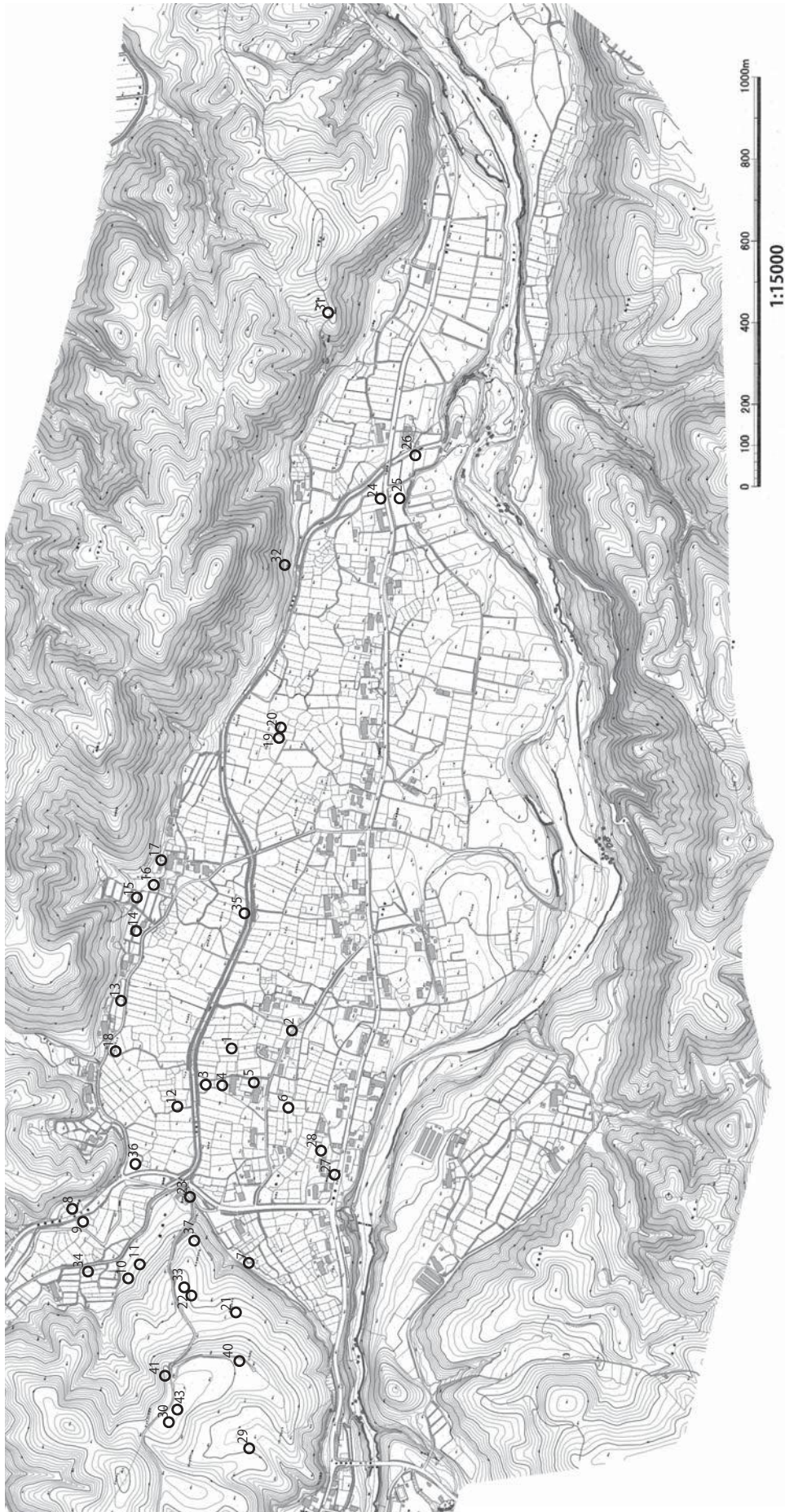


図2-1 骨寺村莊園遺跡における既調査地点(1)

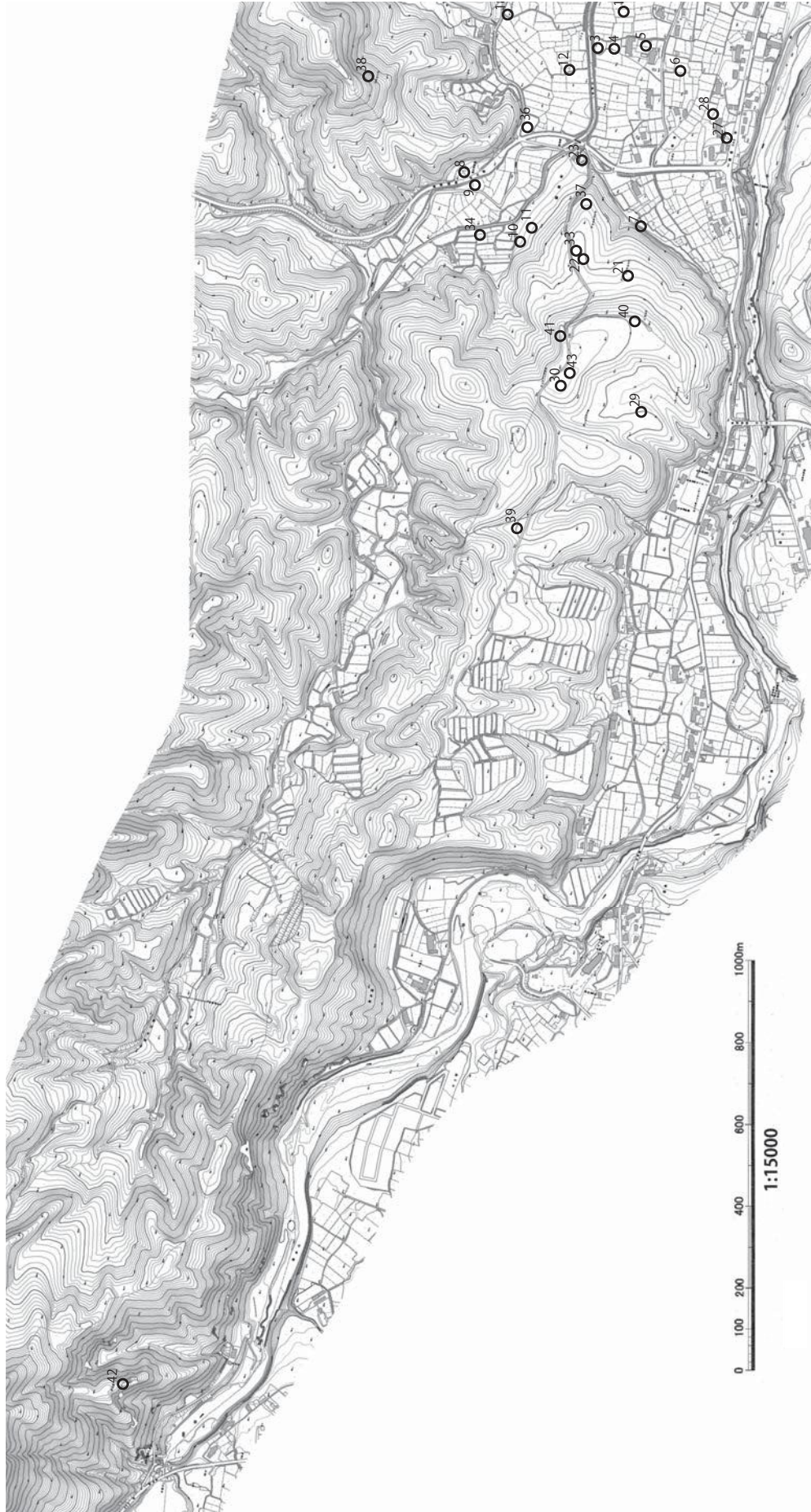


図 2 - 2 骨寺村荘園遺跡における既調査地点(2)

番号	調査地	遺構・遺物	調査年度
1	沖要害52-1	なし	平成11年度
2	沖要害72、77、本寺中屋敷遺跡	掘立柱建物、石組井戸、銅製品	平成11年度
3	駒形85-1	柱穴、柱根、木製品	平成11年度
4	駒形86	小穴	平成11年度
5	駒形89-2	銅製品	平成11年度
6	駒形96-1、107-1	なし	平成11年度
7	駒形40-2、44	なし	平成11年度
8	中川32-1、梅木田遺跡	掘立柱建物、溝、柱根、陶器、中国産磁器片	平成12・25～27年度
9	中川28-1、35	なし	平成12年度
10	中川6	近世造成面、掘立柱建物、建物礎石、池状遺構、近世磁器片	平成12・25～27年度
11	中川4	塚	平成25・26年度
12	要害141-4、146-3	なし	平成12年度
13	要害118、119	なし	平成13年度
14	要害79-1、114-1、115-21、遠西遺跡	掘立柱建物、柱穴、土坑、井戸、溝、柱根、常滑三筋壺片、かわらけ片	平成13・14年度
15	要害70、72	柱穴、井戸、焼土・炭化物	平成14年度
16	要害69-1	なし	平成13年度
17	要害23、54-1	近世板蔵基礎	平成13年度
18	要害127-2	なし	平成14年度
19	若神子31-2、若神子社	石祠	平成16年度
20	若神子43、45、46	なし	平成16年度
21	駒形5、白山社及び駒形根神社	炭窯	平成17年度
22	駒形5、白山社及び駒形根神社	石器	平成17年度
23	駒形8-1、白山社及び駒形根神社	小穴、石器、銭	平成18年度
24	若神子85-3、87-1、90-4、92-2	なし	平成18年度
25	若神子88-1	なし	平成18年度
26	若神子81、86-1、86-4	なし	平成18年度
27	駒形153-1	なし	平成19年度
28	駒形151-1	溝、縄文土器片、石器	平成19年度
29	若井原188、194-35、194-36、平泉野遺跡	陥穴、旧流路、縄文土器片、石器、土師器片、須恵器片	平成21年度
30	若井原194-1、平泉野遺跡	焚火跡、縄文土器片、石器剥片	平成22年度
31	下真坂25-5、慈恵塚	近世陶磁器、近世銭	平成22年度
32	下真坂80-2、不動窟	洞窟、柱穴、縄文土器片、弥生土器片、近世銭	平成23～25年度
33	駒形5、白山社及び駒形根神社	土坑、縄文土器片、石器	平成23年度
34	中川19-1	土坑、縄文土器片、石器	平成20年度
35	要害59-1	小穴	平成20年度
36	要害194-1、194-2	柱穴、土師器片、須恵器片	平成23・24年度
37	駒形7、白山社及び駒形根神社	陥穴、縄文土器片	平成24年度
38	要害204-1、伝ミタケ堂跡	なし	平成24・25年度
39	若井原194-115、平泉野遺跡	塚、縄文土器片、近世磁器片	平成27・28年度
40	若井原194-1、駒形5、白山社及び駒形根神社	竪穴住居、土坑、溝、縄文土器片、土偶、石器、近世磁器片	平成28年度
41	中川9、平泉野遺跡	道路遺構	平成28・29年度
42	若井原194-33、山王窟	近世石造物	平成28年度
43	若井原194-1、平泉野遺跡	竪穴状遺構、縄文土器片、弥生土器片、石器、近世磁器片	平成29年度

※番号は図2-1、図2-2と対応

表1 骨寺村荘園遺跡における既調査地点一覧表

3 平泉野遺跡（中川9、若井原194-1地点）の調査

調査地点は、平泉野台地と呼ばれる丘陵の東端にある南側に張り出した平場の北部の山林である。駒形根神社から西へ向かう林道を約500m進んだ地点から西側に150mの範囲で、一関市巖美町字中川9、字若井原194-1に所在する（図2-43、3）。この平場は平泉野台地の中で最大の平場であり、『陸奥国骨寺村絵図』には、この付近とみられる部分に「骨寺（堂）跡」が描かれている。本調査は、遺構の有無、特に「骨寺（堂）跡」の痕跡を確認するために実施した。

現地での調査期間は平成29年6月12日から10月19日、調査面積は446m²である。

樹木を伐採、刈り払いの後、林道の南北に2ヶ所ずつ、計4ヶ所のトレンチを設定した。北東の1トレンチは28年度に調査を実施したところ、平場の縁辺部の地形に沿って延びる溝を確認したため、調査区を一部拡張して継続調査したものである。1・2トレンチが中川9、3・4トレンチが若井原194-1地点である。

重機で表土を除去してその下の遺構を確認した後、人力で掘削を行った。

利用した測量基準杭の成果は以下の通りである。

基H28-14 X = -113498.338、Y = +9569.839、H = 232.374

基H28-15 X = -113496.133、Y = +9516.690、H = 233.055

基H28-16 X = -113449.703、Y = +9485.911、H = 232.862

（1）基本土層（図7・8、写真図版10-2、12-2）

I層 10YR3/2黒褐色シルト。炭化物を含む。粘性あり。しまりなし。草の根が多く入る。現表土。（図7-1層）

II層 10YR3/3暗褐色シルト。炭化物を含む。粘性あり。しまりなし。草の根が多く入る。表土。（図7-2層）

III層 10YR3/4暗褐色シルト。炭化物を含む。粘性あり。しまりややあり。近世磁器が出土した。（図7-3層）

IV層 10YR4/3にぶい黄褐色シルト。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりあり。自然堆積の様相である。部分的ではあるが上位に2次堆積によるものとみられる灰白色火山灰の小塊を確認し、自然科学分析を行った（第4章）。縄文土器、弥生土器が出土する。遺構の確認はこの層の上面で行い、これ以下の層については、一部で断ち割りを行い断面を観察するに留めた。（図7-4層）

V層 10YR5/6黄褐色粘性シルト。硬くしまり強い。無遺物層。地山。（図7-5層）

（2）確認した遺構

道路遺構1（図4、カラー図版4-1、写真図版1～5、6-1・2）1トレンチの東半で確認した。両側側溝になるとみられる溝1・2とその間にある路面整地層で構成される。平場の外側に位置する溝1は縁辺の地形に沿って西から東に35m、そこから南に向きを変え5m延び、そこで現在東西に走る林道の造成により切られている。西端も直西の自然の谷地形を避けて、調査区外の南西方向にさらに延びるとみられる。上幅約0.8m、深さ約0.2m、断面は皿形である。埋土は暗褐色シルトに地山塊が少量混じる。平場の内側に位置する溝2は1トレンチ中央の拡張部で東西に4.5mを確認した。両端は調査区外にさらに延びるとみられる。上幅約0.6m、深さ約0.2m、断面は椀形である。埋

土はにぶい黄褐色シルトに地山塊が20～30%混じる。路面整地層は溝1・2に切られており、層厚は0.1～0.2m、路面幅は約2.4mである。路面には道路遺構の方向に平行する浅い溝状の凹凸が多くあり、轍の痕跡である可能性がある。出土遺物はないが、路面整地層中に2次堆積によるものとみられる灰白色火山灰の小塊を確認し、これについて自然科学分析を行った(第4章)。また溝1・2、路面整地層中に含まれた炭化物についても自然科学分析を行った(第5章)。

竪穴状遺構1(図7・8、カラー図版4、写真図版11～15) 3トレンチの東端、IV層上面で確認した。風倒木痕を壊して構築している。南北4.0～5.5m、東西5.5～6.0mのやや歪んだ長方形で、深さは最大で検出面から0.4m、軸方向は概ねN-20°-Wである。埋土は暗褐色シルトのほぼ一括した堆積土で、自然堆積の様相である。床は概ね平坦で、貼床とみられる最大で0.2mの厚さの層を確認した。にぶい黄褐色シルトに地山塊が30～40%混じり、しまりはあるが硬化はみられない。この層の上面でピットを10基、焼土を1基確認した。P1～5、7・9は柱穴の可能性があり、その多くは壁際に位置する。直径は0.3～0.6m、深さは0.3m程である。P3・5・7・9で柱痕跡を確認した。カマドは無く、建物の南西隅に近い部分で直径0.8m程の円形に比較的弱い被熱がみられる焼土を確認した。この焼土はP6に切られている。その他、建物の北西隅に壁際に沿って楕円形の土坑1を確認した。長径約2.8m、最大幅1.1m、深さ最大0.5mで、P1に切られている。図8-6層から縄文土器1点、土坑1の埋土上層から縄文土器1点が出土した。また、貼床上面の炭化物について自然科学分析を行った(第5章)。

竪穴状遺構2(図5-6、写真図版7-2、8) 2トレンチの西端、基本土層IV層上面で確認し、その南半を掘削した。南北6.5m、東西1.1m以上でそのほとんどが調査区外にあるため全体形は不明である。深さは最大で検出面から0.24m、軸方向は概ねN-30°-Eである。埋土はにぶい黄褐色シルトに地山塊が30～40%混じり、人為的に埋め戻した可能性がある。床は概ね平坦で、貼床とみられる最大で0.05mの厚さの層を確認した。にぶい黄褐色シルトに地山塊が40～50%混じり、しまりはあるが硬化はみられない。この層の上面でピットを2基確認した。P10は柱穴の可能性があり、西壁で確認した。直径は0.6m、深さは0.32mである。P11は長径0.9mで深さ0.4mで柱痕跡を確認した。カマドの有無は不明である。出土遺物はないが、貼床上面およびP11埋土中の炭化物について自然科学分析を行った(第5章)。

竪穴状遺構3(図9-10、写真図版17～20) 4トレンチの南東部、基本土層IV層上面で確認し、その東半を掘削した。南北6.1m、東西5.35m以上でその南西部は調査区外にあるが、やや歪んだ方形になるとみられる。深さは最大で検出面から0.23m、軸方向は概ねN-27°-Eである。埋土は暗褐色シルトのほぼ一括した堆積土で、自然堆積の様相である。床は概ね平坦で、貼床とみられる最大で0.15mの厚さの層を確認した。暗褐色シルトに地山塊が30～40%混じり、しまりはあるが硬化はみられない。この層の上面で柱穴の可能性のあるピットを9基確認した。P12以外は全て壁際に位置する。直径は0.3～0.7m、深さは最大で0.25mである。いずれも柱痕跡はない。カマドの有無は不明である。図10-1層から縄文土器1点が出土した。貼床層中に2次堆積によるものとみられる灰白色火山灰の小塊を確認し、これについて自然科学分析を行った(第4章)。

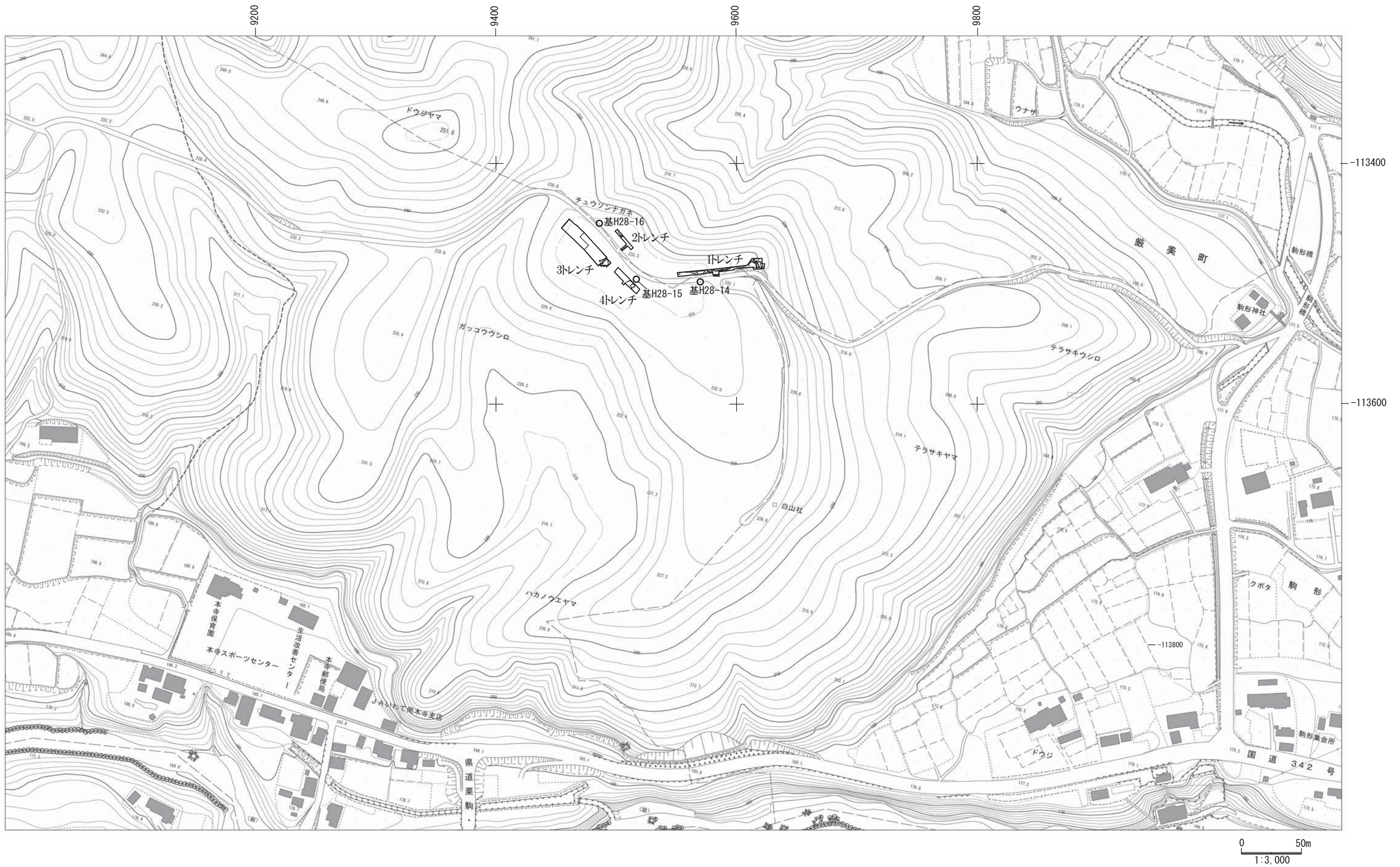
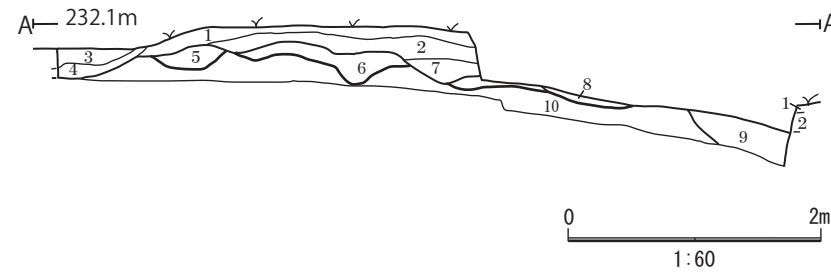


図3 平泉野遺跡調査区配置図



土層注記A

- 1 10YR3/2黒褐色シルト。炭化物を含む。粘性あり。しまりなし。草の根が多く入る。現表土。基本土層I層。
- 2 10YR3/3暗褐色シルト。炭化物を含む。粘性あり。しまりなし。草の根が多く入る。表土。基本土層II層。
- 3 砂利。
- 4 10YR3/3暗褐色シルトに地山塊(径0.5~5.0cm大)が均一に20~30%混じる。炭化物を含む。粘性あり。しまりあり。攪乱層。
- 5 10YR4/3にぶい黄褐色シルトに地山塊(径0.5~10.0cm大)が均一に20~30%混じる。炭化物を含む。粘性あり。しまりあり。溝2(道路側溝)の埋土。
- 6 10YR4/3にぶい黄褐色シルトに地山塊(径0.5~5.0cm大)が均一に30~40%混じる。炭化物を含む。粘性あり。しまりあり。路面整地層。
- 7 10YR3/4暗褐色シルトに地山塊(径0.5~5.0cm大)が均一に10~20%混じる。炭化物を含む。粘性あり。しまりあり。
- 8 10YR3/3暗褐色シルトに地山塊(径0.5~10.0cm大)が均一に3~5%混じる。炭化物を含む。粘性あり。しまりあり。溝1(道路側溝)の埋土。
- 9 10YR3/3暗褐色シルトに地山塊(径0.5~5.0cm大)が均一に10~20%混じる。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりあり。斜面の自然堆積層。
- 10 10YR5/6基褐色粘性シルト。硬くしまり強い。無遺物層。地山。基本土層V層。

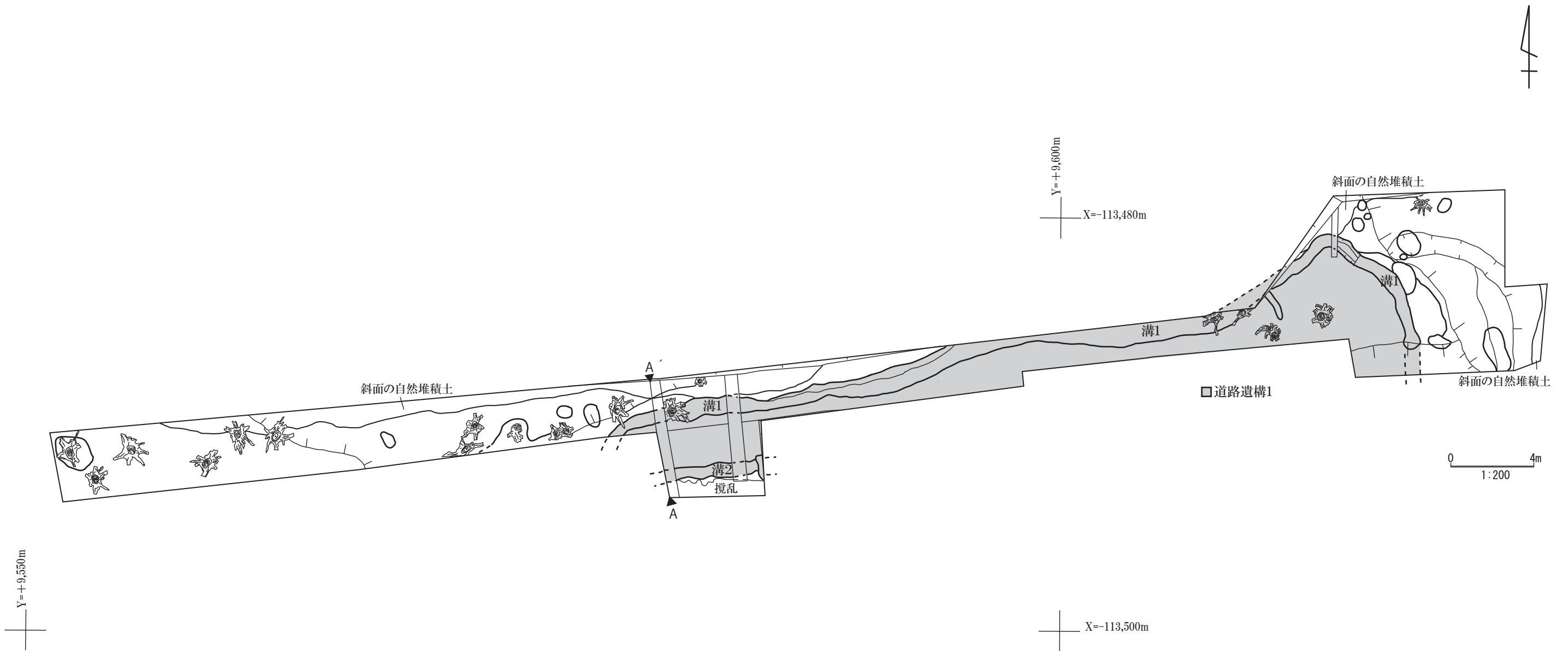
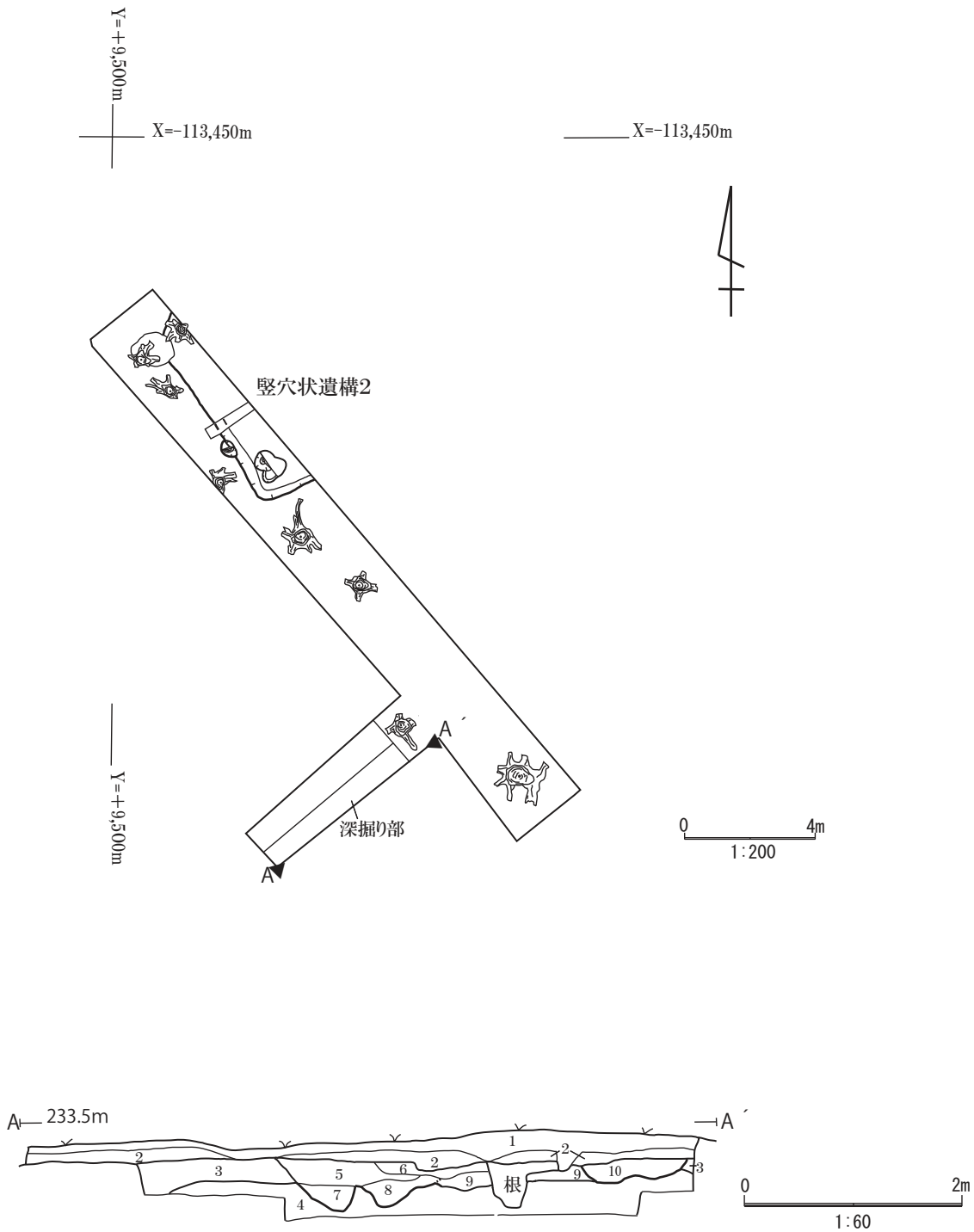


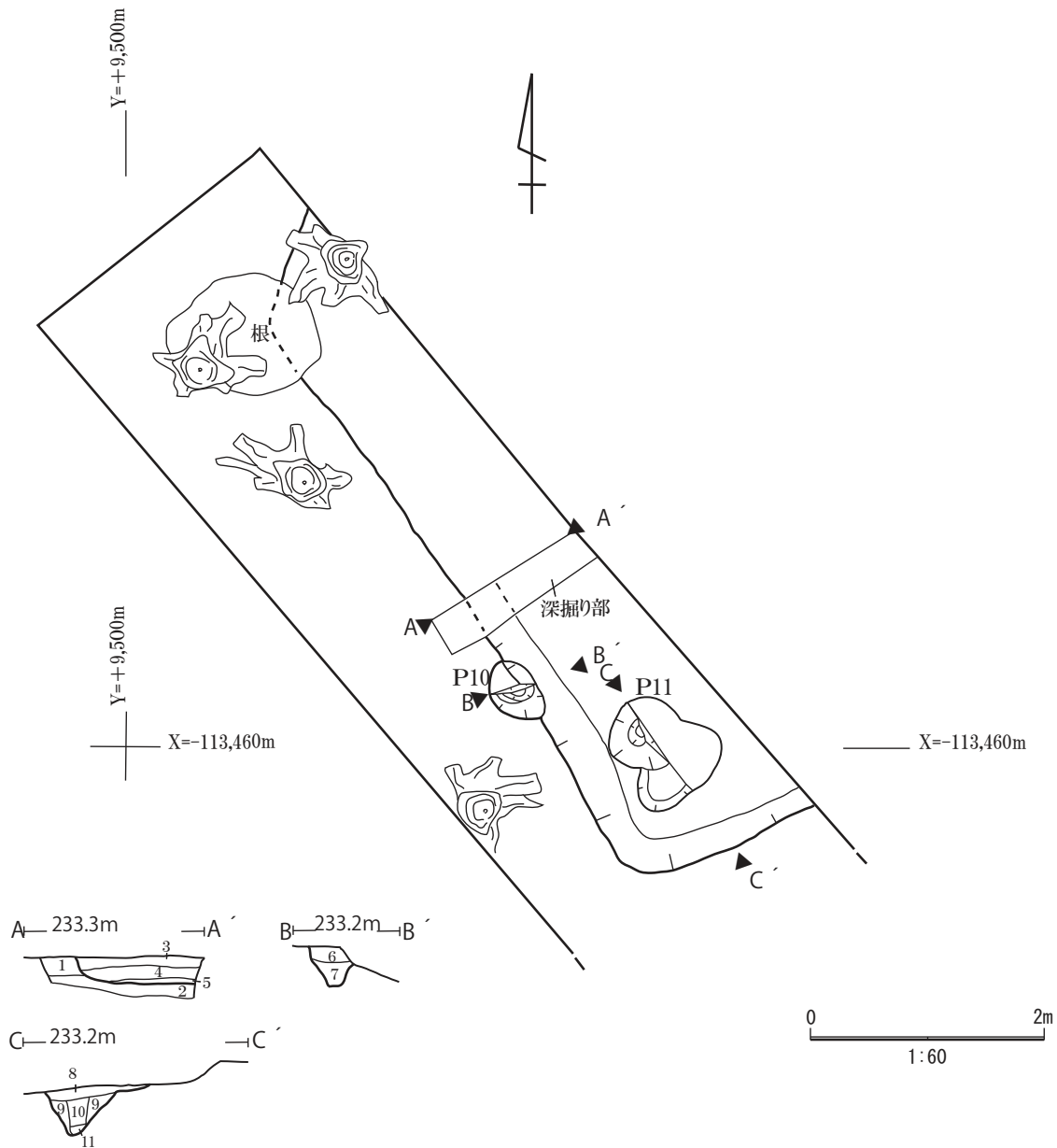
図4 1トレンチ遺構配置図・土層断面図



土層注記A

- 1 10YR3/2黒褐色シルト。炭化物を含む。粘性あり。しまりなし。草の根が多く入る。現表土。基本土層Ⅰ層。
- 2 10YR3/3暗褐色シルト。炭化物を含む。粘性あり。しまりなし。草の根が多く入る。表土。基本土層Ⅱ層。
- 3 10YR3/3暗褐色シルト。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりあり。自然堆積の様相である。部分的にはあるが上位に2次堆積によるものとみられる灰白色火山灰の小塊を確認した。縄文土器、弥生土器が出土する。基本土層Ⅳ層。
- 4 10YR5/6基褐色粘性シルト。硬くしまり強い。無遺物層。地山。基本土層Ⅴ層。
- 5 10YR3/4暗褐色シルト。炭化物を少量含む。粘性あり。しまりあり。
- 6 10YR4/3にぶい黄褐色シルトに地山塊(径0.5~3.0cm大)が下部に多く少量混じる。炭化物を含む。粘性あり。しまりあり。
- 7 10YR4/3にぶい黄褐色シルトに地山塊(径0.5~10.0cm大)が均一に40~50%混じる。炭化物を少量含む。粘性あり。しまりあり。溝か。
- 8 10YR4/3にぶい黄褐色シルトに地山塊(径0.5~5.0cm大)が均一に20~30%混じる。炭化物を少量含む。粘性あり。しまりあり。溝か。
- 9 地山塊が主体で暗褐色シルトが均一に少量混じる。炭化物を少量含む。粘性あり。しまりあり。
- 10 10YR4/3にぶい黄褐色シルトに地山塊(径0.5~5.0cm大)が均一に20~30%混じる。炭化物を少量含む。粘性あり。しまりあり。溝か。

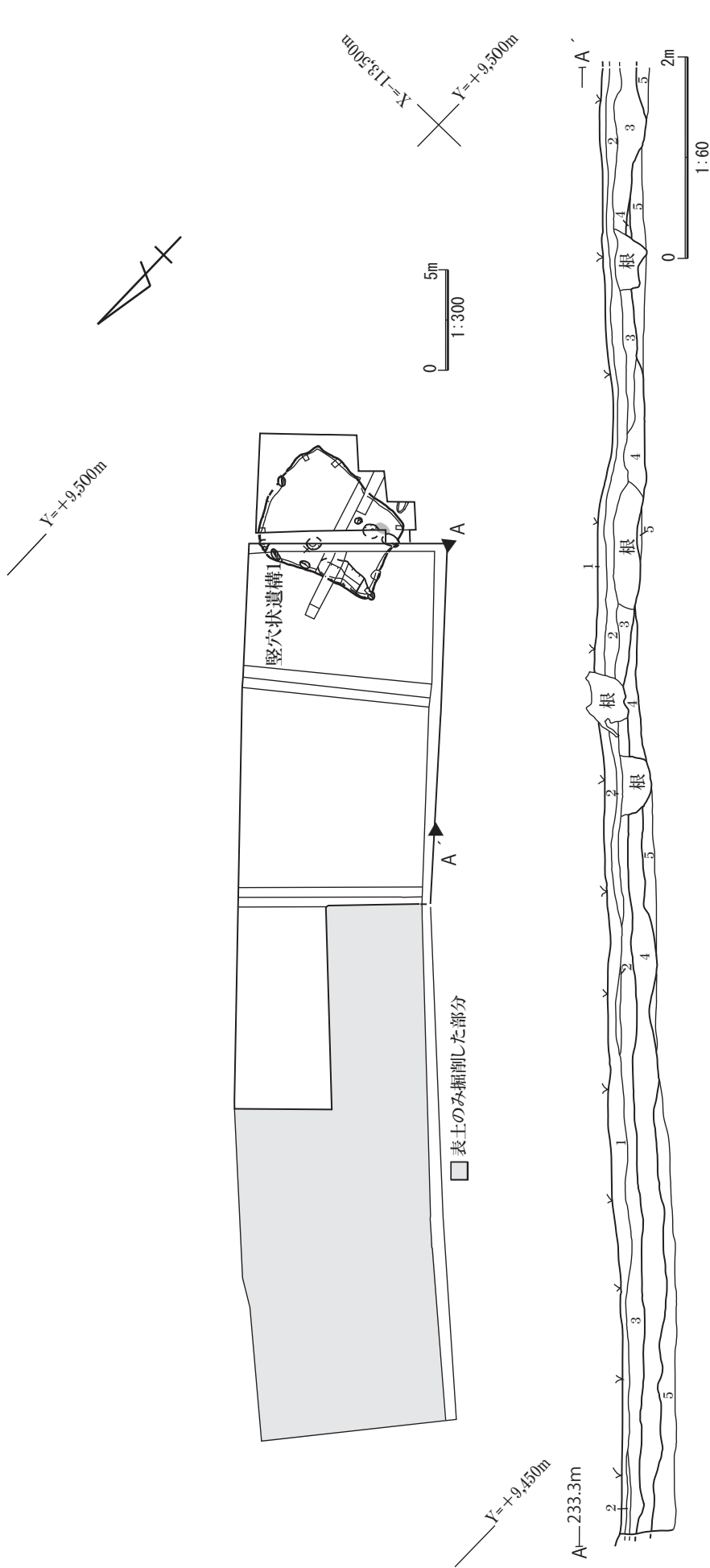
図5 2トレンチ遺構配置図・土層断面図



土層注記ABC

- 1 10YR3/3暗褐色シルト。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりあり。自然堆積の様相である。部分的にはあるが上位に2次堆積によるものとみられる灰白色火山灰の小塊を確認した。縄文土器、弥生土器が出土する。基本土層IV層。
- 2 10YR5/6基褐色粘性シルト。硬くしまり強い。無遺物層。地山。基本土層V層。
- 3 10YR4/3にぶい黄褐色シルトに地山塊(径0.5~10.0cm大)が均一に30~40%、黒褐色シルトが均一に少量混じる。炭化物を含む。粘性あり。しまりあり。竪穴状遺構2の埋土。根による攪乱か。
- 4 10YR4/3にぶい黄褐色シルトに地山塊(径0.5~10.0cm大)が均一に30~40%混じる。灰白色火山灰?の小塊が混じる。炭化物を含む。粘性あり。しまりあり。竪穴状遺構2の埋土。
- 5 地山粘土塊が主体でにぶい黄褐色シルトが均一に10~20%混じる。炭化物を含む。粘性強い。しまりあり。竪穴状遺構2の貼床層。
- 6 10YR3/2黒褐色シルトに暗褐色シルトが少量混じる。炭化物を少量含む。粘性あり。しまりあり。竪穴状遺構2のP10埋土上層。
- 7 10YR3/4暗褐色シルトに地山塊(径0.5~3.0cm大)が均一に30~40%、一部に黒褐色シルトが少量混じる。炭化物を少量含む。粘性あり。しまりあり。P10埋土下層。
- 8 10YR4/3にぶい黄褐色シルトに地山塊(径0.5~1.0cm大)が均一に少量混じる。炭化物を多く含む。粘性あり。しまりあり。P11埋土上層。
- 9 10YR4/3にぶい黄褐色シルトに地山塊(径0.5~5.0cm大)が均一に10~20%混じる。炭化物を含む。粘性あり。しまりあり。P11埋土下層。掘り方。
- 10 10YR4/2灰黄褐色シルトに地山塊(径0.5~3.0cm大)が均一に10~20%混じる。炭化物を含む。粘性あり。しまりあり。P11埋土下層。柱痕跡か。
- 11 10YR4/2灰黄褐色粘土。しまりあり。P11埋土最下層。柱痕跡か。

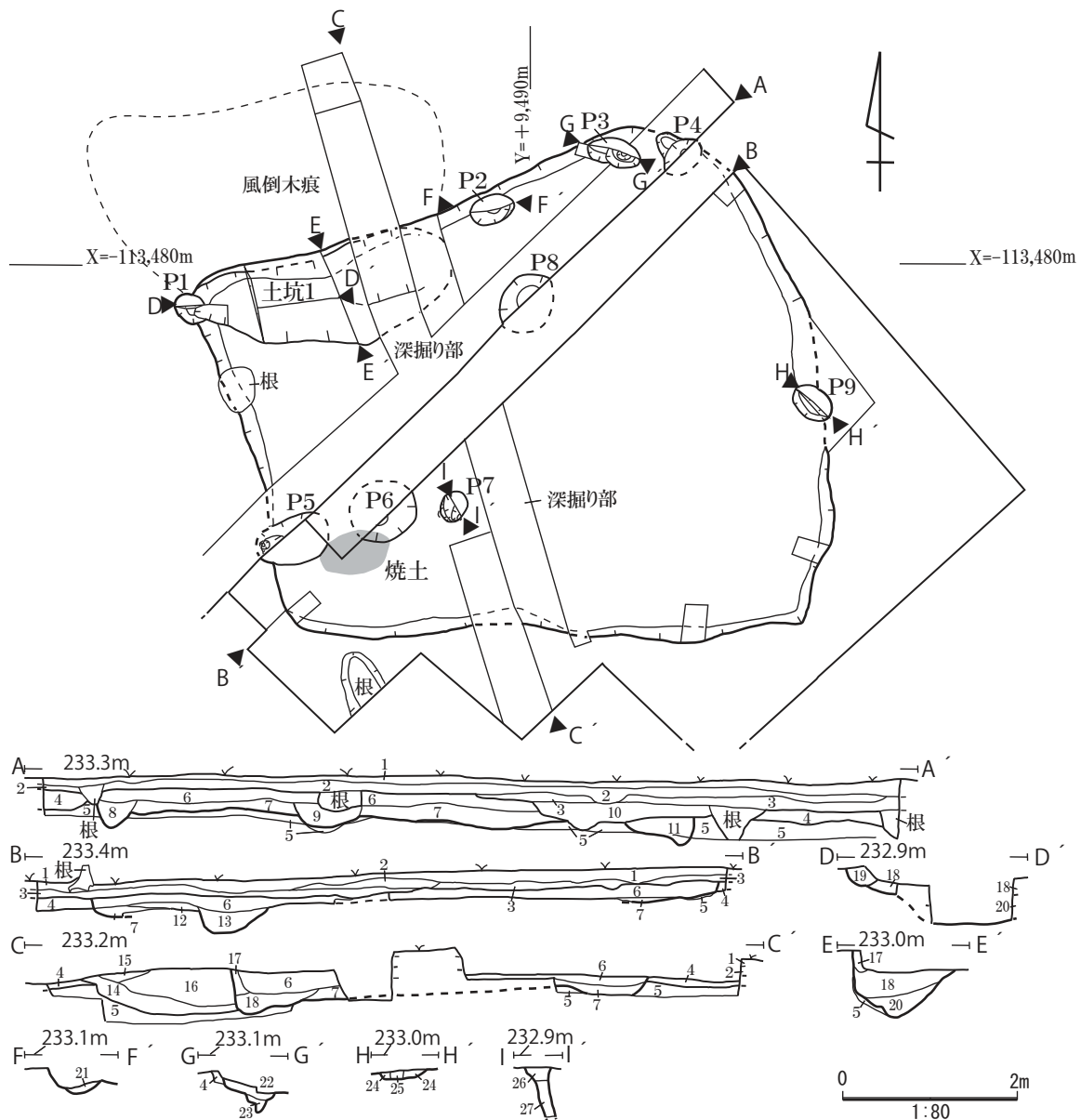
図6 2トレンチ 竪穴状遺構2平面図・土層断面図



土層注記A

- 1 10YR3/2黒褐色シルト。炭化物を含む。粘性あり。草の根が多く入る。現表土。基本土層I層。
- 2 10YR3/3暗褐色シルト。炭化物を含む。粘性あり。しまりなし。草の根が多く入る。表土。基本土層II層。
- 3 10YR3/4暗褐色シルト。炭化物を含む。粘性あり。しまりややあり。近世磁器が出土した。基本土層III層。
- 4 10YR3/3暗褐色シルト。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりあり。自然堆積の様相である。部分的にはあるが上位に2次堆積によるものとみられる灰白色火山灰の小塊を確認した。縄文土器、弥生土器が出土する。基本土層IV層。
- 5 10YR5/6基褐色粘性シルト。硬くしまり強い。無遺物層。地山。基本土層V層。

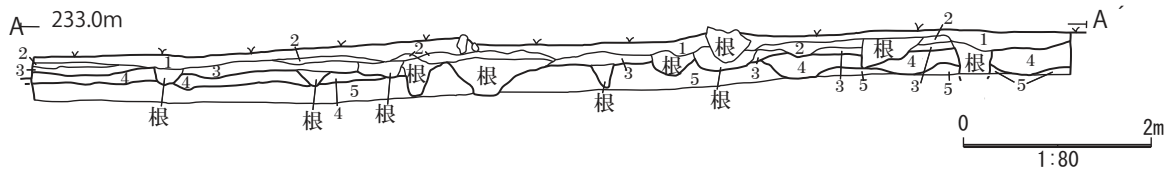
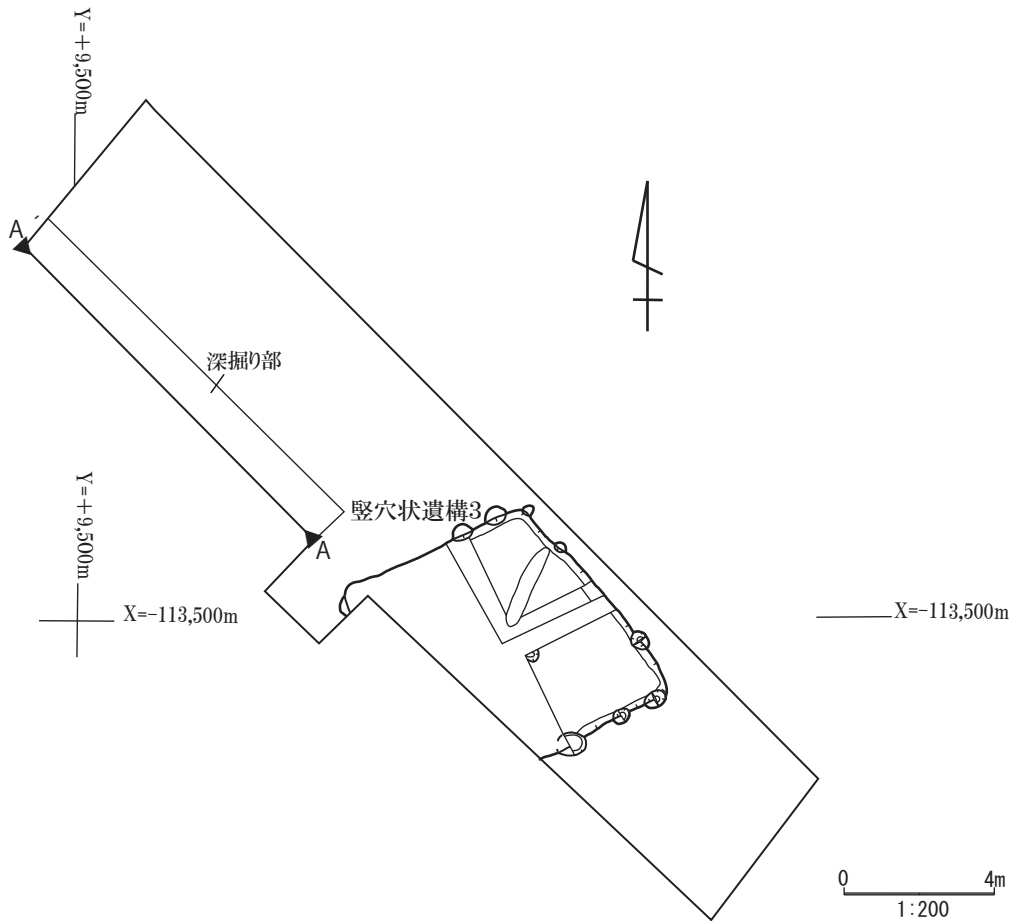
図7 3トレンチ遺構配置図・土層断面図



土層注記ABCDEFGHI

- 1 10YR3/2黒褐色シルト。炭化物を含む。粘性あり。しまりなし。草の根が多く入る。現表土。基本土層Ⅰ層。
- 2 10YR3/3暗褐色シルト。炭化物を含む。粘性あり。しまりなし。草の根が多く入る。表土。基本土層Ⅱ層。
- 3 10YR3/4暗褐色シルト。炭化物を含む。粘性あり。しまりややあり。近世磁器が出土した。基本土層Ⅲ層。
- 4 10YR3/3暗褐色シルト。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりあり。自然堆積の様相である。部分的にはあるが上位に2次堆積によるものとみられる灰白色火山灰の小塊を確認した。縄文土器、弥生土器が出土する。基本土層Ⅳ層。
- 5 10YR5/6基褐色粘性シルト。硬くしまり強い。無遺物層。地山。基本土層Ⅴ層。
- 6 10YR3/3暗褐色シルトに地山塊(径0.5~3.0cm大)が均一に微量混じる。炭化物を含む。粘性あり。しまりあり。堅穴状遺構1の埋土。
- 7 10YR4/3こぶい黄褐色シルトに地山粘土塊(径0.5~10.0cm大)が均一に30~40%混じる。炭化物を含む。粘性強い。しまりあり。堅穴状遺構1の貼床層。
- 8 10YR4/3こぶい黄褐色シルトに地山塊(径0.5~5.0cm大)が均一に20~30%混じる。炭化物を含む。粘性あり。しまりあり。P4埋土。
- 9 10YR3/4暗褐色シルトに地山塊(径0.5~3.0cm大)が一部に微量混じる。炭化物を少量含む。粘性あり。しまりあり。P8埋土。
- 10 10YR3/3暗褐色シルトに地山塊(径0.5~10.0cm大)が均一に20~30%混じる。炭化物を含む。粘性あり。しまりややなし。風倒木痕か。
- 11 10YR4/3こぶい黄褐色シルトに地山塊(径0.5~5.0cm大)が一部に20~30%混じる。炭化物を含む。粘性あり。しまりあり。P5埋土。
- 12 10YR3/4暗褐色シルトに地山塊(径0.5~2.0cm大)が均一に微量混じる。焼土の小塊・炭化物を多く含む。粘性あり。しまりあり。堅穴状遺構1の埋土。
- 13 10YR3/2黒褐色シルトに地山塊(径0.5~5.0cm大)が下部に多く20~30%混じる。炭化物を多く含む。粘性あり。しまりややなし。P6埋土。
- 14 10YR3/4暗褐色シルトに地山塊(径0.5~10.0cm大)が均一に30~40%混じる。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりあり。風倒木痕。
- 15 10YR4/3こぶい黄褐色シルト。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりあり。
- 16 10YR4/6褐色シルト。炭化物を微量含む。粘性あり。しまり強い。風倒木痕。
- 17 10YR4/6褐色シルト。炭化物を微量含む。粘性あり。しまり強い。堅穴状遺構1の西壁際にある層。
- 18 10YR4/3こぶい黄褐色シルトに地山塊(径0.5~3.0cm大)が一部に10~20%混じる。炭化物を少量含む。粘性あり。しまりあり。土坑1埋土上層。
- 19 10YR3/4暗褐色シルトに地山塊(径0.5~3.0cm大)が下部に多く5~10%混じる。炭化物を少量含む。粘性あり。しまりあり。P1埋土。
- 20 10YR4/3こぶい黄褐色シルトに地山塊(径0.5~10.0cm大)が一部に20~30%混じる。炭化物を少量含む。粘性あり。しまりあり。土坑1埋土下層。
- 21 10YR3/4暗褐色シルトに地山塊(径0.5~3.0cm大)が均一に10~20%混じる。炭化物を少量含む。粘性あり。しまりあり。P2埋土。
- 22 10YR3/3暗褐色シルトに地山塊(径0.5~5.0cm大)が均一に20~30%混じる。炭化物を少量含む。粘性あり。しまりあり。P3埋土上層。
- 23 地山塊が主体で暗褐色シルトが少量混じる。炭化物を少量含む。粘性あり。しまりあり。P3埋土下層。
- 24 10YR4/3こぶい黄褐色シルトに地山塊(径0.5~5.0cm大)が均一に20~30%混じる。炭化物を少量含む。粘性あり。しまりあり。P9埋土。掘り方。
- 25 10YR3/3暗褐色シルトに地山塊(径0.5~2.0cm大)が均一に少量混じる。炭化物を少量含む。粘性あり。しまりあり。P9埋土。柱痕跡。
- 26 10YR3/3暗褐色シルトに地山塊(径0.5~2.0cm大)が一部に少量混じる。炭化物を少量含む。粘性あり。しまりあり。P7埋土。
- 27 地山塊が主体で暗褐色シルトが均一に少量混じる。炭化物を少量含む。粘性あり。しまりあり。P7埋土。柱痕跡。

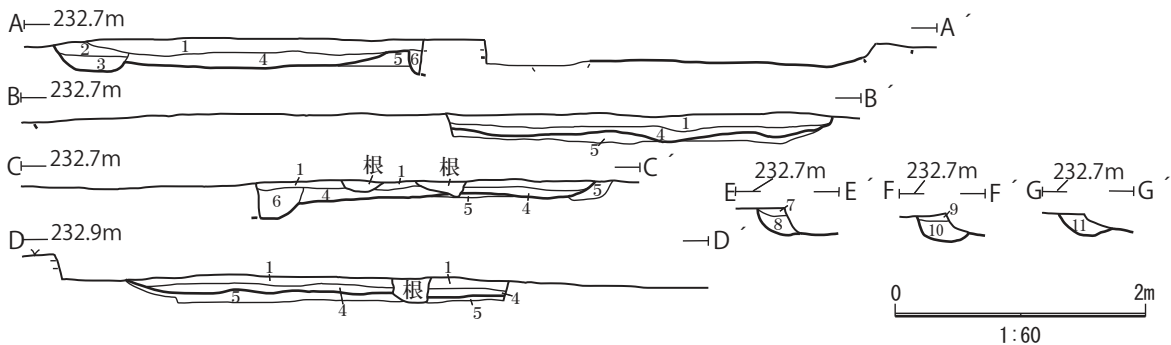
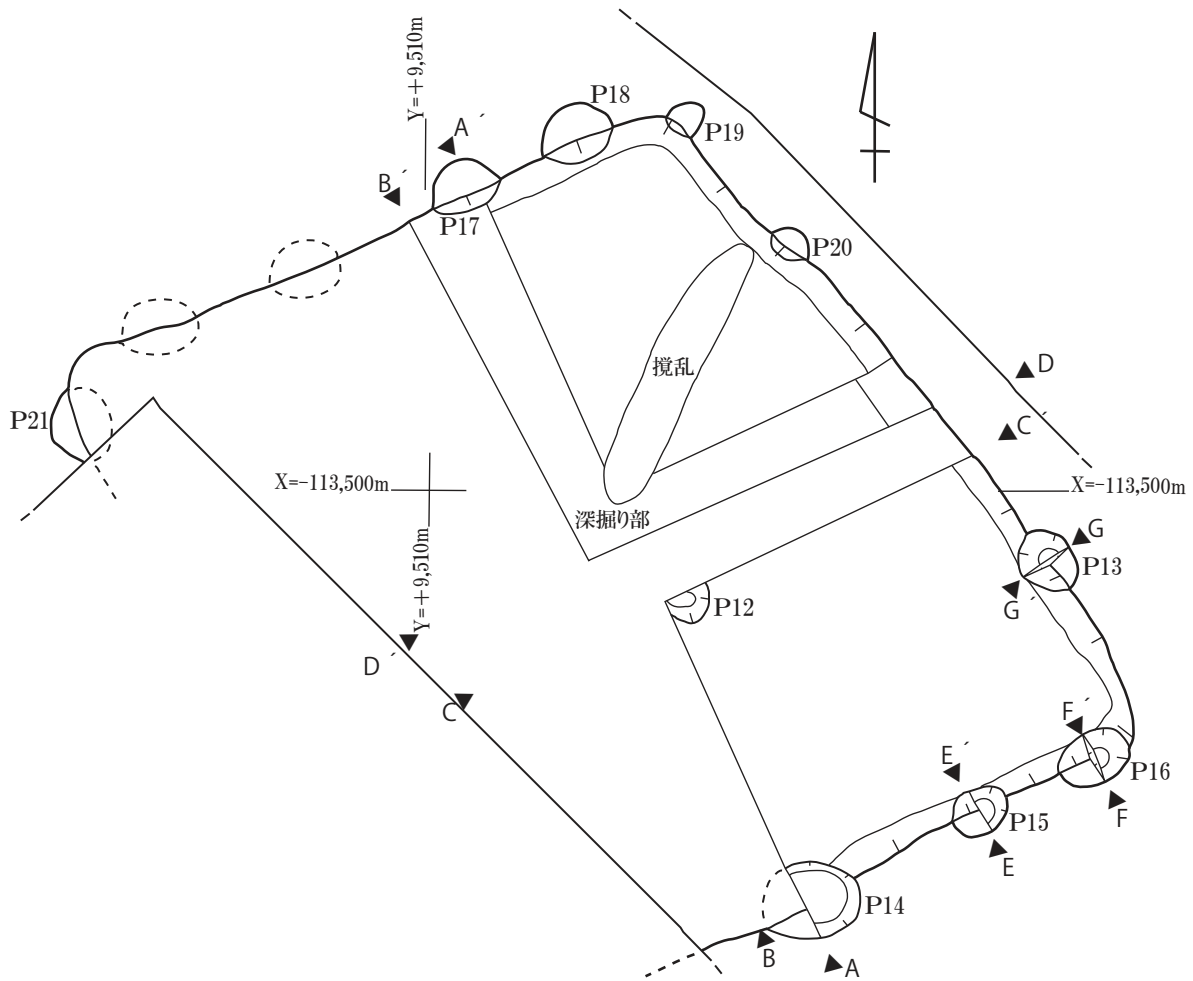
図8 3トレンチ 堅穴状遺構1平面図・土層断面図



土層注記A

- 1 10YR3/2黒褐色シルト。炭化物を含む。粘性あり。しまりなし。草の根が多く入る。現表土。基本土層Ⅰ層。
- 2 10YR3/3暗褐色シルト。炭化物を含む。粘性あり。しまりなし。草の根が多く入る。表土。基本土層Ⅱ層。
- 3 10YR3/4暗褐色シルト。炭化物を含む。粘性あり。しまりややあり。近世磁器が出土した。基本土層Ⅲ層。
- 4 10YR3/3暗褐色シルト。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりあり。自然堆積の様相である。部分的には上位に2次堆積によるものとみられる灰白色火山灰の小塊を確認した。縄文土器、弥生土器が出土する。基本土層Ⅳ層。
- 5 10YR5/6基褐色粘性シルト。硬くしまり強い。無遺物層。地山。基本土層Ⅴ層。

図9 4トレンチ遺構配置図・土層断面図



土層注記ABCDEF G

- 1 10YR3/4暗褐色シルトに地山塊(径0.5~3.0cm大)が均一に5~10%混じる。炭化物を含む。粘性あり。しまりあり。堅穴状遺構3の埋土。
- 2 10YR3/4暗褐色シルトに地山塊(径0.5~3.0cm大)が均一に5~10%混じる。炭化物を含む。粘性あり。しまりあり。P14埋土上層。
- 3 10YR3/4暗褐色シルトに地山塊(径0.5~5.0cm大)が均一に20~30%混じる。炭化物を含む。粘性あり。しまりあり。P14埋土下層。
- 4 10YR3/4暗褐色シルトに地山塊(径0.5~10.0cm大)が均一に20~30%混じる。炭化物を含む。粘性あり。しまりあり。堅穴状遺構3の貼床層。
- 5 10YR5/6基褐色粘性シルト。硬くしまり強い。無遺物層。地山。基本土層V層。
- 6 10YR3/4暗褐色シルトに地山塊(径0.5~5.0cm大)が均一に30~40%混じる。炭化物を少量含む。粘性あり。しまりあり。P12埋土。
- 7 10YR3/4暗褐色シルト。炭化物を少量含む。粘性あり。しまりあり。P15埋土上層。
- 8 10YR3/4暗褐色シルトに地山塊(径0.5~3.0cm大)が均一に20~30%混じる。炭化物を少量含む。粘性あり。しまりあり。P15埋土下層。
- 9 10YR3/4暗褐色シルトに地山塊(径0.5~1.0cm大)が均一に微量混じる。炭化物を少量含む。粘性あり。しまりあり。P16埋土上層。
- 10 10YR3/4暗褐色シルトに地山塊(径0.5~3.0cm大)が均一に20~30%混じる。炭化物を少量含む。粘性あり。しまりあり。P16埋土下層。
- 11 10YR3/4暗褐色シルトに地山塊(径0.5~3.0cm大)が均一に20~30%混じる。炭化物を少量含む。粘性あり。しまりあり。P13埋土。

図10 4トレンチ 堅穴状遺構3平面図・土層断面図

(3) 出土遺物 (図11、写真図版21)

縄文時代の土器4点、弥生時代の土器3点、縄文もしくは弥生時代の土器113点、石器(剥片を含む)26点、近世磁器2点の合計148点が出土した。竪穴状遺構1から縄文土器2点、竪穴状遺構3から縄文土器1点が出土した他は、全て遺構外からである。

抽出した遺物のうち主要なものは、遺物観察表(表5)に掲載した。石器4点、縄文土器2点、弥生土器1点を図示した。

(二階堂)

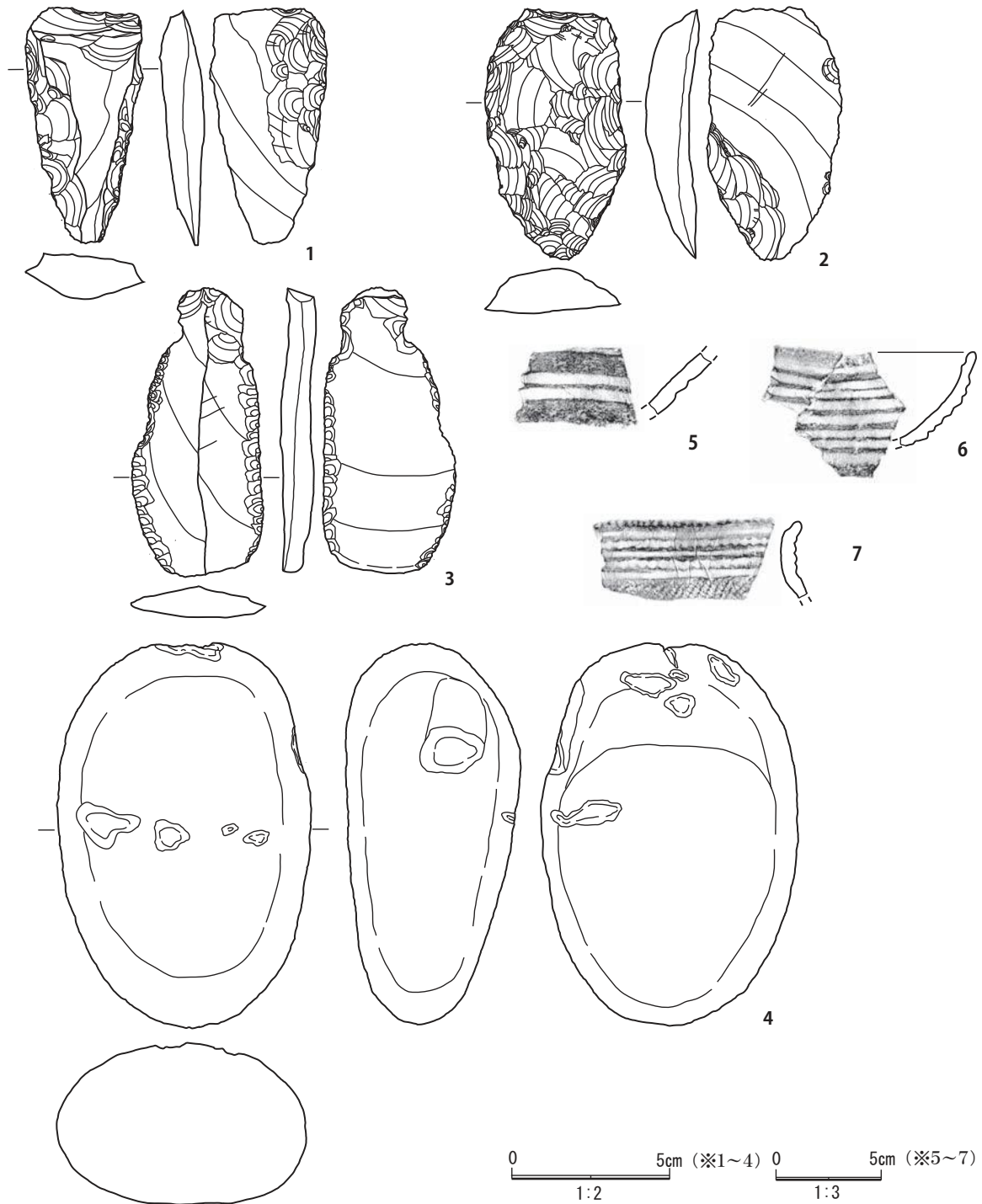


図11 出土遺物

4 平泉野遺跡（中川9、若井原194-1地点）に係る火山灰分析

はじめに

平泉野遺跡は、岩手県一関市巖美町字中川9および字若井原194-1に所在する。発掘調査では、道路遺構と竪穴状遺構3棟が検出されている。道路遺構の路面整地層の検出面、竪穴状遺構1の遺構外、竪穴状遺構3の貼床層から火山灰とされる堆積物が検出された。これらの特性を明らかにして、火山灰である場合には、噴出年代の明らかにされている指標テフラとの対比を行い、遺構に関わる年代資料を得ることとした。

1 試料

試料は、各遺構の覆土および調査区内の土層から採取された火山灰とされる堆積物3点である。トレンチ1の道路遺構路面整地層（図4-6層）中から火山灰①、トレンチ3の竪穴状遺構1北側遺構外の褐色包含層（基本土層IV層、図8-4層）中から火山灰②、トレンチ4の竪穴状遺構3の下層である貼床層から火山灰③がそれぞれ採取されている。火山灰②の採取された褐色包含層は、竪穴状遺構1が掘り込まれている層位とされている。

試料の外観は、いずれも褐～灰黄褐色を呈する砂質シルトである。

なお、道路遺構の路面、溝1、2、竪穴状遺構1、竪穴状遺構2で検出された炭化物26点が年代測定され、縄文時代前期中葉頃から後期中葉頃、弥生時代後期頃、7世紀から9世紀頃、10世紀から12世紀頃、17世紀から20世紀頃の年代値が得られた（5章参照）。

2 分析方法

試料適量を蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。

火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。

さらに火山ガラスについては、その屈折率を測定することにより、テフラを特定するための指標とする。屈折率の測定は、古澤（1995）のMAIOTを使用した温度変化法を用いた。

3 結果

分析結果を表1に示す。3点の試料ともに処理後に得られた砂分は、多量の軽石と少量の細砂～極細砂径の火山ガラスとから構成される。軽石の特徴は、いずれの試料も同様であり、最大径は火山灰①で約0.9mm、火山灰②で約0.6mm、火山灰③で約0.5mmである。いずれの試料も粒径の淘汰は良好であり、ほとんどは径0.4mm以下を示す。色調は白色を呈し、発泡は良好～やや良好である。火山ガラスのほとんどは無色透明の塊状の軽石型であり、少量の繊維束状のものも混在する。また、極めて微量の無色透明のバブル型も認められる。火山ガラスと軽石の他には、少量の斜長石や斜方輝石、単斜輝石などのテフラ由来の遊離結晶や安山岩と思われる岩石片などが認められる。

表2 テフラ分析結果

試料名	遺構	スコリア	火山ガラス		軽石		
		量	量	色調・形態	量	色調・発泡度	最大粒径
火山灰①	1トレンチ 道路遺構 路面整地層(図4-6層)中	—	++	cl・pm>>cl・bw	++++	W・g~sg	0.9
火山灰②	3トレンチ 褐色包含層(図8-4層)中	—	++	cl・pm>>cl・bw	++++	W・g~sg	0.6
火山灰③	4トレンチ 竪穴状遺構3 貼床層(図10-4層)中	—	++	cl・pm>>cl・bw	++++	W・g~sg	0.5

凡例 —:含まれない. (+):きわめて微量. +:微量. ++:少量. +++:中量. ++++:多量.

W:白色.

g:良好. sg:やや良好. sb:やや不良. b:不良. 最大粒径はmm.

cl:無色透明. bw:バブル型. md:中間型. pm:軽石型.

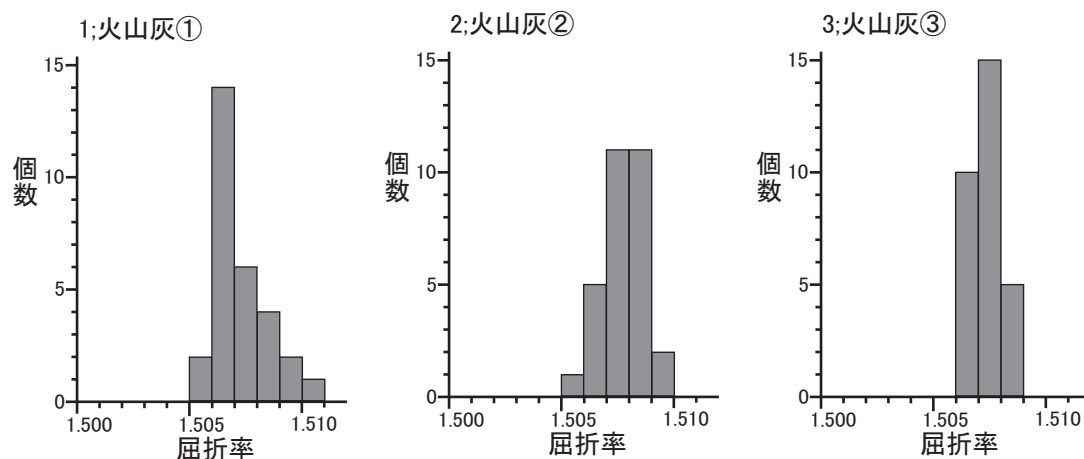


図12 火山ガラスの屈折率測定結果

火山ガラスの屈折率測定結果を図1に示す。火山灰①はn1.505-1.510のレンジに入り、n1.506-1.507にモードがある。火山灰②はn1.505-1.509のレンジに入り、n1.507-1.508にモードがある。火山灰③n1.506-1.508のレンジに入り、n1.506-1.507にモードがある。

4 考察

火山灰①~③は、細粒の軽石および火山ガラスを主体とするテフラである。上述した碎屑物の特徴および平泉野遺跡の地理的位置と、これまでに研究された東北地方におけるテフラの産状(町田ほか(1981;1984)、Arai et al. (1986)、町田・新井(2003)など)との比較から、試料は、十和田aテフラ(To-a)の降下堆積物に由来すると考えられる。To-aは、平安時代に十和田カルデラから噴出したテフラであり、給源周辺では火砕流堆積物と降下軽石からなるテフラとして、火砕流の及ばなかった地域では軽石質テフラとして、さらに給源から離れた地域では細粒の火山ガラス質テフラとして、東北地方のほぼ全域で確認されている(町田ほか, 1981)。また、その噴出年代については、早川・小山(1998)による詳細な調査により西暦915年とされている。なお、町田・新井(2003)に記載されたTo-aの火山ガラスの屈折率は、n1.496-1.508の広いレンジを示す。ただし、n1.502以下の低い屈

折率の火山ガラスを主体とする火山灰層は、南方へは広がらず、十和田カルデラ周辺とその東方地域に分布が限られるとされている（町田ほか，1981）。おそらく、今回検出されたテフラは、低屈折率の火山ガラスを含まないTo-aに相当するものと考えられる。

今回の試料のうち、火山灰①は、道路遺構の路面整地層中から検出されている。このことから、道路遺構はTo-a降灰以降すなわち古く見ても10世紀初頭以降に構築されたと考えることができる。また、火山灰②が採取された褐色包含層には、竪穴状遺構1が掘り込まれている。これより竪穴状遺構1もTo-a降灰以降に構築されたと考えられる。さらに、火山灰③は竪穴状遺構3の貼床層から検出されていることから、竪穴状遺構はTo-a以降に構築されたと考えることができる。

これらの結果から、検出された遺構はいずれも十和田 a テフラが降灰した10世紀初頭よりは新しい時期に構築されたものと考えられる。

文献

Arai, F.・Machida, H.・Okumura, K.・Miyachi, T.・Soda, T.・Yamagata, K, 1986, Catalog for late quaternary marker-

tephras in Japan II -Tephras occurring in Northeast Honshu and Hokkaido-. Geographical reports of Tokyo Metropolitan University No. 21, 223-250.

古澤 明, 1995, 火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別. 地質学雑誌, 101, 123-133.

早川由紀夫・小山真人, 1998, 日本海をはさんで10世紀に相次いで起こった二つの大噴火の年月日 -十和田湖と白頭山-. 火山, 43, 403-407.

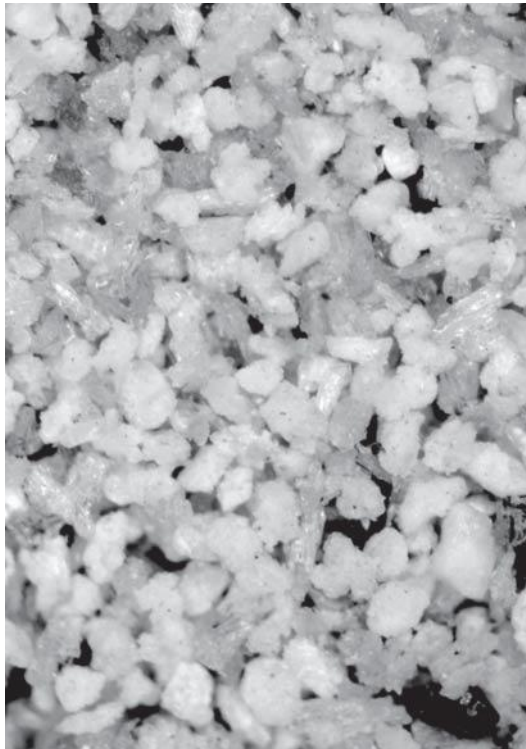
町田 洋・新井房夫, 2003, 新編 火山灰アトラス. 東京大学出版会, 336p.

町田 洋・新井房夫・森脇 広, 1981, 日本海を渡ってきたテフラ. 科学, 51, 562-569.

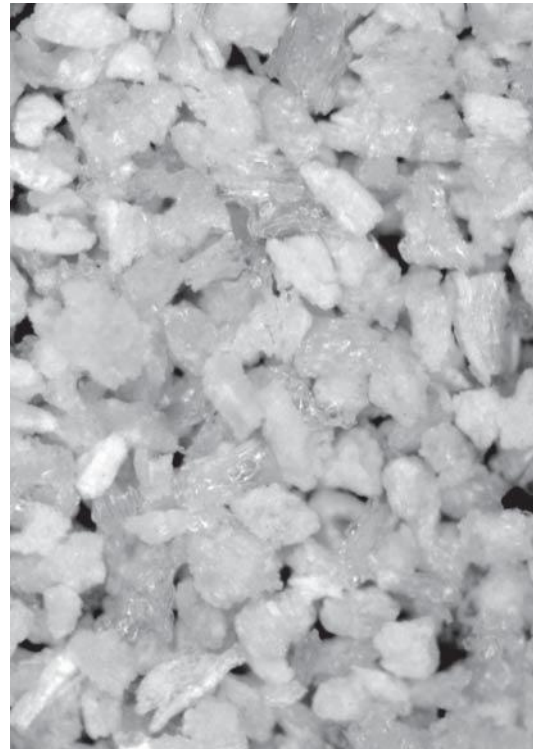
町田 洋・新井房夫・杉原重夫・小田静夫・遠藤邦彦, 1984, テフラと日本考古学 -考古学研究と関連するテフラのカタログ-. 渡辺直経 (編) 古文化財に関する保存科学と人文・自然科学. 同朋舎, 865-928.

※) 本分析はパリノ・サーヴェイ株式会社の協力を得て行った。

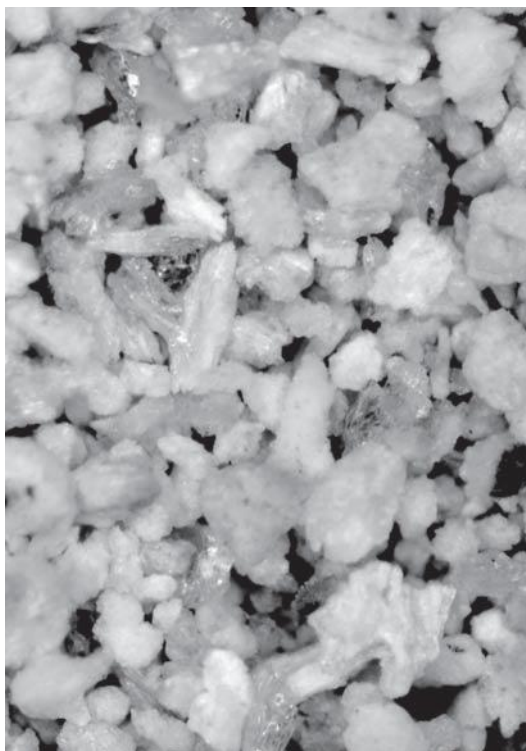
図版1 テフラ



1.To-aの軽石・火山ガラス(1トレンチ
道路遺構路面整地層中;火山灰①)



2.To-aの軽石・火山ガラス(3トレンチ
褐色包含層中;火山灰②)



3.To-aの軽石・火山ガラス(4トレンチ)
竪穴状遺構3 (貼床層中;火山灰③)

0.5mm

5 平泉野遺跡（中川9、若井原194-1地点）に係る放射性炭素年代測定（AMS法）

（株）加速器分析研究所

1 測定対象試料

平泉野遺跡は、岩手県一関市巖美町字中川9および字若井原194-1に所在する。測定対象試料は、道路遺構および竪穴状遺構から検出された炭化物合計26点である（表3）。

道路遺構は、路面と両側の側溝（溝1、溝2）からなる。それぞれから出土した炭化物13点を採取した。竪穴状遺構は3棟検出されている。いずれも浅い掘り込みの竪穴で、貼床があり、壁際にピットが検出されている。このうち、2棟（竪穴状遺構1、2）から出土した炭化物13点を採取した。

なお、路面整地層、竪穴状遺構1の遺構外、竪穴状遺構3の貼床層から火山灰サンプルが採取され、分析が行われている（4章参照）。

2 測定の意義

遺構の年代を明らかにする。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸（AAA:Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1 mol/l（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO₂）を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度（¹³C/¹²C）、¹⁴C濃度（¹⁴C/¹²C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（H₂Ox II）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度（¹³C/¹²C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表1）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ¹⁴C年代（Libby Age : yrBP）は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0 yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568

年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。 ^{14}C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。 ^{14}C 年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMCが小さい(^{14}C が少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上)の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。
- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma=68.2\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma=95.4\%$)で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース(Reimer et al. 2013)を用い、OxCalv4.3較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

6 測定結果

測定結果を表1、2に示す。

測定した26点の試料には、年代幅がかなり見られる。以下、(1)道路遺構、(2)竪穴状遺構に分けて記述する。

(1) 道路遺構

道路遺構は、溝2、路面整地層、溝1からなる。それぞれから出土した炭化物13点を測定した。

溝2から出土した4点の試料No. 1~4の ^{14}C 年代は、No. 1が $950 \pm 20\text{yrBP}$ 、No. 2が $920 \pm 20\text{yrBP}$ 、No. 3が $1010 \pm 20\text{yrBP}$ 、No. 4が $4010 \pm 20\text{yrBP}$ である。暦年較正年代(1σ)は、No. 1が1030~1150cal AD、No. 2が1046~1157cal ADの間にそれぞれ3つの範囲、No. 3が996~1032cal ADの範囲、No. 4が2567~2486cal BCの間に2つの範囲で示される。No. 1~3は平安時代後半頃、No. 4は縄文時代中期末葉頃に相当する(小林編 2008、佐原 2005)。

路面から出土した7点の試料No. 5~11の ^{14}C 年代は、 $4000 \pm 20\text{yrBP}$ (No. 6)から $940 \pm 20\text{yrBP}$ (No. 7)の間にあり、かなりの年代幅がある。暦年較正年代(1σ)は、最も古いNo. 6が2566~2479cal BCの間に2つの範囲、最も新しいNo. 7が1035~1151cal ADの間に3つの範囲で示される。No. 7、10を除く5点が縄文時代中期末葉から後期中葉頃、No. 7は平安時代後半頃、No. 10は弥生時代後期頃に相当する(小林 2009、小林編 2008、佐原 2005)。

溝1から出土した2点の試料No. 12、14の ^{14}C 年代は、No. 12が $1860 \pm 20\text{yrBP}$ 、No. 14が $140 \pm 20\text{yrBP}$

である。暦年較正年代 (1σ) は、No. 12が $126\sim 214\text{cal AD}$ の範囲、No. 14が $1681\sim 1937\text{cal AD}$ の間に6つの範囲で示される。No. 12が弥生時代後期頃、No. 14は近世から現代頃に相当する (小林 2009、佐原 2005)。

道路遺構から出土した炭化物13点の年代は、縄文時代中期末葉から後期中葉頃、弥生時代後期頃、平安時代後半頃、近世から現代頃とかなりの年代幅がある。これらのうち、比較的年代が新しく、点数が多いのは、No. 1、2、3、7の4点で10世紀から12世紀の平安時代後半頃、最も新しいNo. 14は、近世から現代頃の年代を示す。

なお、No. 10、12が含まれる1～3世紀頃の暦年較正に関しては、北半球で広く用いられる較正曲線IntCalに対して日本産樹木年輪試料の測定値が系統的に異なるとの指摘がある (尾寄2009、坂本2010など)。その日本産樹木のデータを用いてこの測定結果を暦年較正した場合、ここで報告する較正年代値よりも新しくなる可能性がある。

また、No. 14が含まれる日本列島周辺の近世における暦年較正に関しては、IntCalに表れない較正曲線のウィグルの存在など、細部においてIntCalと異なる可能性が指摘されている (中尾ほか2015、坂本ほか2015)。このため、今回IntCalで較正されたNo. 14の較正年代についても、日本産樹木年輪試料のデータに基づいて較正すれば、若干異なる年代値となる可能性がある。なお、較正年代については、記載された値よりも新しい可能性がある点に注意を要する (表2下の警告参照)。

試料13点の炭素含有率は62% (No. 1) ～71% (No. 14) の適切な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

(2) 竪穴状遺構

竪穴状遺構1および竪穴状遺構2の貼床上、ピット、柱穴と考えられる遺構から出土した炭化物13点を測定した。

竪穴状遺構1から出土した6点の炭化物は、No. 15～19の5点が貼床上、No. 20がP5上面から採取されている。試料の ^{14}C 年代は、 $5070\pm 30\text{yrBP}$ (No. 20) から $4050\pm 30\text{yrBP}$ (No. 16) の間にある。暦年較正年代 (1σ) は、最も古いNo. 20が $3943\sim 3802\text{cal BC}$ の間に3つの範囲、最も新しいNo. 16が $2620\sim 2496\text{cal BC}$ の間に2つの範囲で示される。No. 19、20が縄文時代前期中葉頃、No. 15、17が縄文時代中期前葉から中葉頃、No. 18が縄文時代中期中葉頃、No. 16が縄文時代中期後葉から末葉頃に相当し (小林編 2008)、やや年代幅がみられる。

竪穴状遺構2から出土した7点の炭化物は、No. 21～23がP11、No. 24がP11上層、No. 25がP11の可能性のある層、No. 26、28が貼床上から採取されている。試料の ^{14}C 年代は、 $1370\pm 20\text{yrBP}$ (No. 26) から $1220\pm 20\text{yrBP}$ (No. 25) の間にある。暦年較正年代 (1σ) は、最も古いNo. 26が $649\sim 665\text{cal AD}$ の範囲、最も新しいNo. 25が $731\sim 867\text{cal AD}$ の間に4つの範囲で示される。特に、7世紀から8世紀頃の年代値を含む試料が多い。

試料13点の炭素含有率は60% (No. 25) ～73% (No. 20) の適切な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

表3 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料 形態	処理 方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-171236	No.1	道路遺構 溝2	炭化物	AaA	-27.36 ± 0.37	950 ± 20	88.86 ± 0.25
IAAA-171237	No.2	道路遺構 溝2	炭化物	AAA	-27.12 ± 0.33	920 ± 20	89.17 ± 0.24
IAAA-171238	No.3	道路遺構 溝2	炭化物	AaA	-25.84 ± 0.43	1,010 ± 20	88.23 ± 0.25
IAAA-171239	No.4	道路遺構 溝2	炭化物	AAA	-24.80 ± 0.26	4,010 ± 20	60.73 ± 0.19
IAAA-171240	No.5	道路遺構 路面整地層	炭化物	AAA	-28.37 ± 0.52	3,930 ± 20	61.31 ± 0.19
IAAA-171241	No.6	道路遺構 路面整地層	炭化物	AAA	-25.57 ± 0.33	4,000 ± 20	60.77 ± 0.19
IAAA-171242	No.7	道路遺構 路面整地層	炭化物	AAA	-26.42 ± 0.38	940 ± 20	88.92 ± 0.25
IAAA-171243	No.8	道路遺構 路面整地層	炭化物	AAA	-24.99 ± 0.30	3,380 ± 20	65.67 ± 0.20
IAAA-171244	No.9	道路遺構 路面整地層	炭化物	AAA	-24.25 ± 0.33	3,960 ± 20	61.10 ± 0.19
IAAA-171245	No.10	道路遺構 路面整地層	炭化物	AAA	-26.99 ± 0.43	1,900 ± 20	78.96 ± 0.23
IAAA-171246	No.11	道路遺構 路面整地層	炭化物	AAA	-25.13 ± 0.27	3,870 ± 20	61.76 ± 0.19
IAAA-171247	No.12	道路遺構 溝1	炭化物	AAA	-25.29 ± 0.41	1,860 ± 20	79.37 ± 0.23
IAAA-171248	No.14	道路遺構 溝1	炭化物	AAA	-24.66 ± 0.24	140 ± 20	98.32 ± 0.27
IAAA-171249	No.15	竪穴状遺構1 貼床上面	炭化物	AAA	-26.50 ± 0.40	4,450 ± 30	57.46 ± 0.19
IAAA-171250	No.16	竪穴状遺構1 貼床上面	炭化物	AAA	-25.63 ± 0.43	4,050 ± 30	60.40 ± 0.19
IAAA-171251	No.17	竪穴状遺構1 貼床上面	炭化物	AAA	-23.72 ± 0.21	4,440 ± 30	57.51 ± 0.20
IAAA-171252	No.18	竪穴状遺構1 貼床上面	炭化物	AaA	-24.96 ± 0.36	4,380 ± 30	57.94 ± 0.18
IAAA-171253	No.19	竪穴状遺構1 貼床上面	炭化物	AaA	-26.49 ± 0.38	5,060 ± 30	53.24 ± 0.17
IAAA-171254	No.20	竪穴状遺構1 P5 上面	炭化物	AAA	-25.52 ± 0.31	5,070 ± 30	53.23 ± 0.17
IAAA-171255	No.21	竪穴状遺構2 P11	炭化物	AAA	-23.54 ± 0.24	1,300 ± 20	85.08 ± 0.24
IAAA-171256	No.22	竪穴状遺構2 P11	炭化物	AaA	-25.71 ± 0.39	1,280 ± 20	85.23 ± 0.25
IAAA-171257	No.23	竪穴状遺構2 P11	炭化物	AAA	-25.86 ± 0.41	1,310 ± 20	84.95 ± 0.24
IAAA-171258	No.24	竪穴状遺構2 P11 上層	炭化物	AAA	-25.42 ± 0.47	1,320 ± 20	84.88 ± 0.24
IAAA-171259	No.25	竪穴状遺構2 P11?	炭化物	AaA	-26.30 ± 0.39	1,220 ± 20	85.93 ± 0.24
IAAA-171260	No.26	竪穴状遺構2 貼床上面	炭化物	AAA	-25.63 ± 0.26	1,370 ± 20	84.33 ± 0.23
IAAA-171261	No.28	竪穴状遺構2 貼床上面	炭化物	AAA	-25.52 ± 0.32	1,290 ± 20	85.17 ± 0.23

[IAA 登録番号 : #8730]

表4 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代) (1)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用(yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-171236	990 ± 20	88.43 ± 0.24	949 ± 22	1030calAD - 1049calAD (17.6%) 1084calAD - 1125calAD (38.5%) 1137calAD - 1150calAD (12.1%)	1025calAD - 1155calAD (95.4%)
IAAA-171237	960 ± 20	88.78 ± 0.23	920 ± 21	1046calAD - 1094calAD (42.0%) 1120calAD - 1141calAD (18.0%) 1147calAD - 1157calAD (8.1%)	1037calAD - 1162calAD (95.4%)
IAAA-171238	1,020 ± 20	88.08 ± 0.24	1,006 ± 22	996calAD - 1032calAD (68.2%)	986calAD - 1045calAD (90.5%) 1099calAD - 1120calAD (4.5%) 1144calAD - 1146calAD (0.3%)
IAAA-171239	4,000 ± 20	60.76 ± 0.18	4,005 ± 24	2567calBC - 2521calBC (55.0%) 2498calBC - 2486calBC (13.2%)	2574calBC - 2473calBC (95.4%)
IAAA-171240	3,990 ± 20	60.89 ± 0.17	3,930 ± 24	2474calBC - 2437calBC (33.5%) 2420calBC - 2404calBC (12.8%) 2379calBC - 2349calBC (21.8%)	2489calBC - 2338calBC (94.4%) 2319calBC - 2310calBC (1.0%)
IAAA-171241	4,010 ± 20	60.70 ± 0.18	4,000 ± 24	2566calBC - 2524calBC (48.6%) 2497calBC - 2479calBC (19.6%)	2573calBC - 2471calBC (95.4%)
IAAA-171242	970 ± 20	88.67 ± 0.24	942 ± 22	1035calAD - 1050calAD (13.9%) 1083calAD - 1126calAD (40.4%) 1136calAD - 1151calAD (13.8%)	1029calAD - 1155calAD (95.4%)
IAAA-171243	3,380 ± 20	65.67 ± 0.19	3,378 ± 24	1692calBC - 1636calBC (68.2%)	1741calBC - 1711calBC (17.8%) 1699calBC - 1621calBC (77.6%)
IAAA-171244	3,950 ± 20	61.19 ± 0.18	3,957 ± 24	2559calBC - 2536calBC (18.7%) 2491calBC - 2461calBC (49.5%)	2569calBC - 2518calBC (27.6%) 2500calBC - 2436calBC (57.5%) 2421calBC - 2403calBC (4.0%) 2380calBC - 2348calBC (6.2%)
IAAA-171245	1,930 ± 20	78.64 ± 0.22	1,897 ± 23	81calAD - 126calAD (68.2%)	54calAD - 170calAD (93.4%) 194calAD - 209calAD (2.0%)
IAAA-171246	3,870 ± 20	61.74 ± 0.18	3,871 ± 24	2452calBC - 2420calBC (17.1%) 2406calBC - 2378calBC (16.7%) 2350calBC - 2295calBC (34.4%)	2463calBC - 2286calBC (94.9%) 2247calBC - 2244calBC (0.5%)
IAAA-171247	1,860 ± 20	79.32 ± 0.22	1,856 ± 23	126calAD - 214calAD (68.2%)	85calAD - 228calAD (95.4%)

表4 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代) (2)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用(yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-171248	130 ± 20	98.39 ± 0.27	136 ± 22	1681calAD - 1698calAD (10.7%)* 1724calAD - 1738calAD (8.7%)* 1754calAD - 1762calAD (3.8%)* 1803calAD - 1815calAD (7.4%)* 1834calAD - 1878calAD (24.4%)* 1917calAD - 1937calAD (13.1%)*	1675calAD - 1711calAD (15.4%)* 1716calAD - 1778calAD (23.9%)* 1799calAD - 1891calAD (40.1%)* 1909calAD - 1942calAD (15.9%)*
IAAA-171249	4,480 ± 30	57.29 ± 0.19	4,450 ± 27	3316calBC - 3273calBC (14.4%) 3266calBC - 3237calBC (15.6%) 3168calBC - 3165calBC (0.8%) 3110calBC - 3081calBC (14.5%) 3069calBC - 3026calBC (23.0%)	3335calBC - 3212calBC (41.9%) 3191calBC - 3152calBC (7.0%) 3136calBC - 3014calBC (46.5%)
IAAA-171250	4,060 ± 20	60.32 ± 0.18	4,050 ± 25	2620calBC - 2565calBC (39.6%) 2532calBC - 2496calBC (28.6%)	2833calBC - 2819calBC (3.1%) 2659calBC - 2651calBC (1.1%) 2634calBC - 2487calBC (91.1%)
IAAA-171251	4,420 ± 30	57.66 ± 0.19	4,444 ± 27	3311calBC - 3295calBC (5.2%) 3286calBC - 3275calBC (3.5%) 3265calBC - 3239calBC (13.7%) 3107calBC - 3023calBC (45.9%)	3331calBC - 3214calBC (35.5%) 3187calBC - 3156calBC (4.9%) 3129calBC - 3010calBC (52.7%) 2980calBC - 2961calBC (1.4%) 2952calBC - 2942calBC (0.8%)
IAAA-171252	4,380 ± 20	57.94 ± 0.18	4,384 ± 25	3022calBC - 2999calBC (17.0%) 2994calBC - 2929calBC (51.2%)	3090calBC - 3048calBC (14.6%) 3035calBC - 2916calBC (80.8%)
IAAA-171253	5,090 ± 30	53.08 ± 0.17	5,063 ± 26	3942calBC - 3907calBC (24.5%) 3880calBC - 3854calBC (18.4%) 3846calBC - 3831calBC (9.5%) 3824calBC - 3801calBC (15.8%)	3951calBC - 3795calBC (95.4%)
IAAA-171254	5,070 ± 30	53.17 ± 0.17	5,065 ± 26	3943calBC - 3909calBC (22.5%) 3879calBC - 3854calBC (17.9%) 3847calBC - 3802calBC (27.8%)	3952calBC - 3796calBC (95.4%)
IAAA-171255	1,270 ± 20	85.33 ± 0.23	1,298 ± 22	670calAD - 710calAD (45.7%) 746calAD - 764calAD (22.5%)	664calAD - 724calAD (63.4%) 739calAD - 768calAD (32.0%)
IAAA-171256	1,300 ± 20	85.10 ± 0.23	1,284 ± 23	682calAD - 715calAD (40.0%) 744calAD - 766calAD (28.2%)	669calAD - 770calAD (95.4%)
IAAA-171257	1,320 ± 20	84.80 ± 0.22	1,309 ± 22	664calAD - 693calAD (48.4%) 747calAD - 763calAD (19.8%)	660calAD - 720calAD (69.4%) 741calAD - 767calAD (26.0%)
IAAA-171258	1,320 ± 20	84.80 ± 0.23	1,317 ± 23	661calAD - 690calAD (55.9%) 750calAD - 761calAD (12.3%)	656calAD - 718calAD (74.5%) 742calAD - 767calAD (20.9%)

表4 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代) (3)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用(yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-171259	1,240 \pm 20	85.70 \pm 0.23	1,218 \pm 22	731calAD - 736calAD (3.5%) 769calAD - 779calAD (8.6%) 790calAD - 830calAD (32.4%) 837calAD - 867calAD (23.7%)	714calAD - 744calAD (12.8%) 765calAD - 886calAD (82.6%)
IAAA-171260	1,380 \pm 20	84.23 \pm 0.23	1,368 \pm 22	649calAD - 665calAD (68.2%)	636calAD - 682calAD (95.4%)
IAAA-171261	1,300 \pm 20	85.08 \pm 0.23	1,289 \pm 22	678calAD - 712calAD (41.3%) 745calAD - 765calAD (26.9%)	666calAD - 730calAD (60.1%) 736calAD - 770calAD (35.3%)

[参考値]

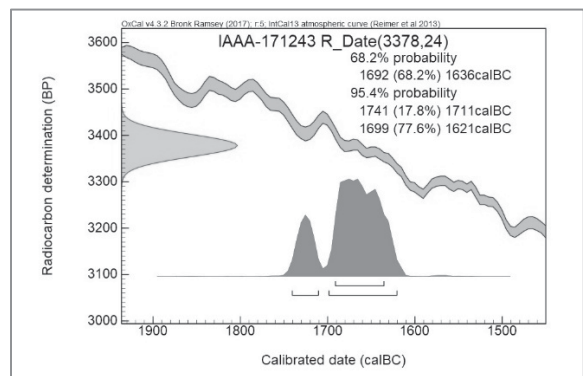
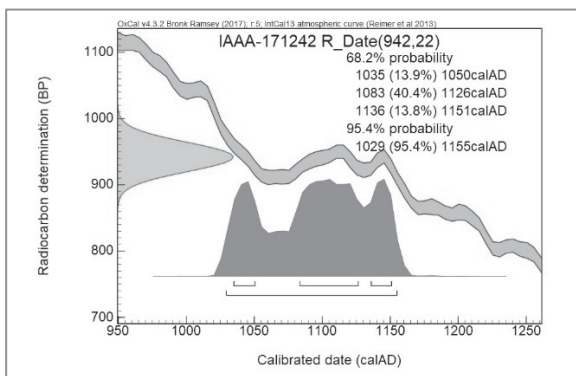
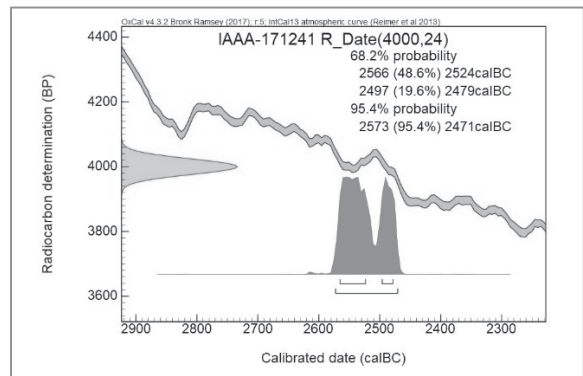
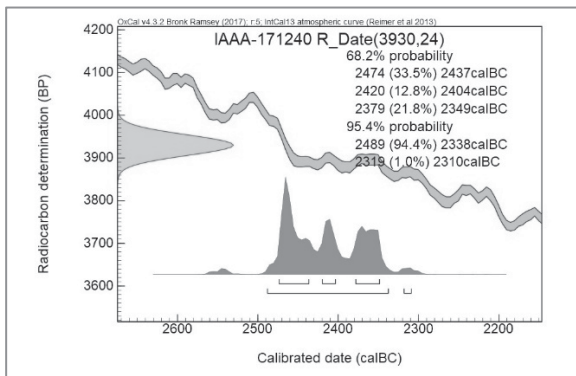
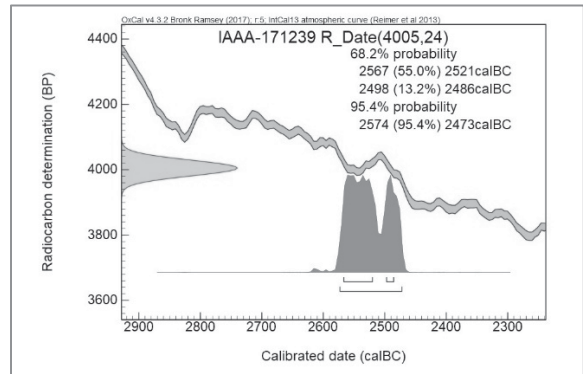
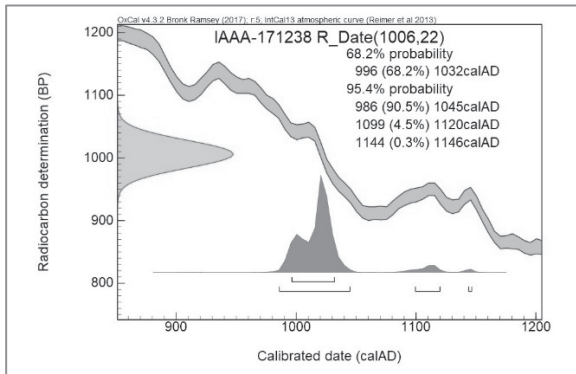
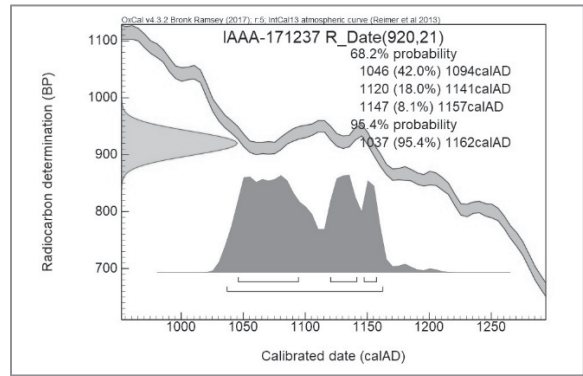
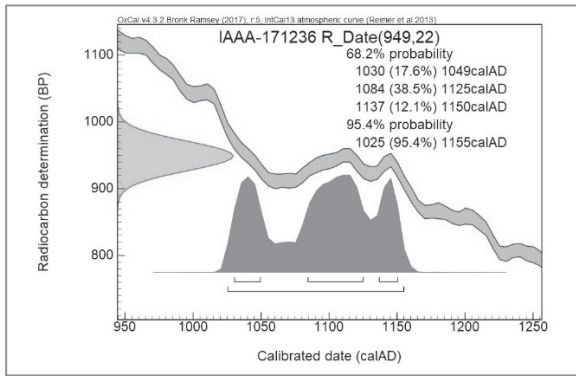
* Warning! Date may extend out of range

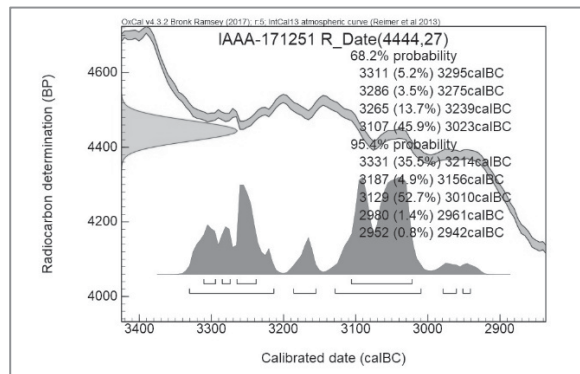
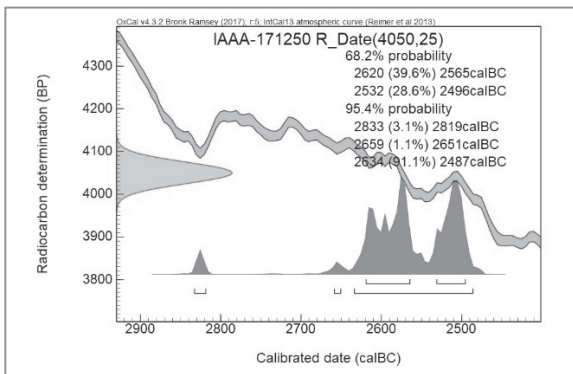
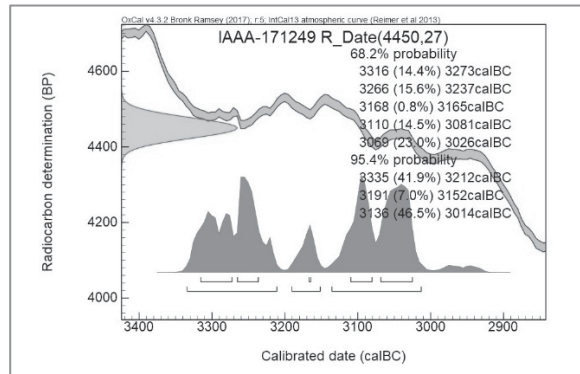
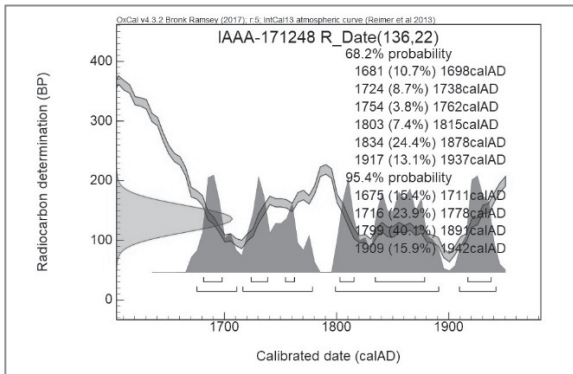
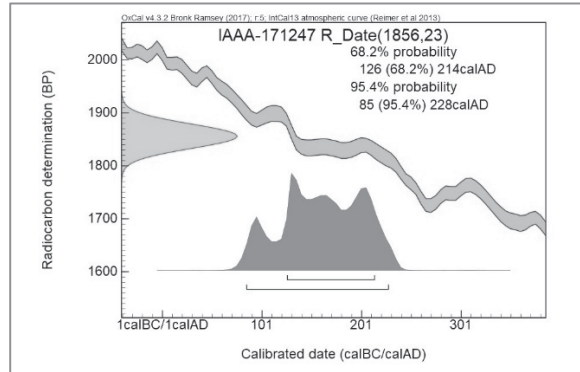
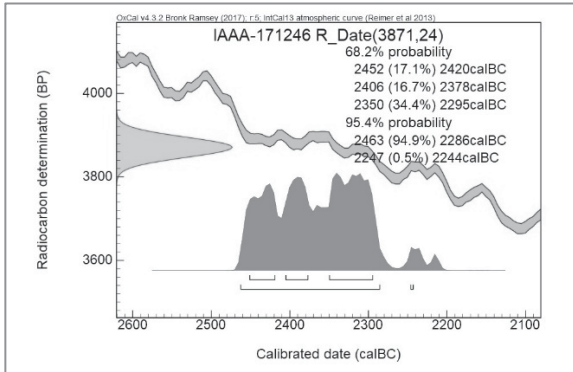
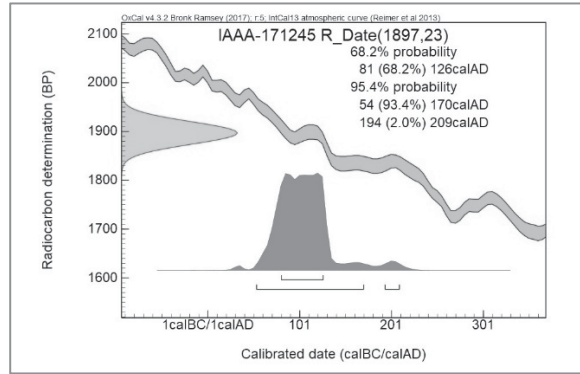
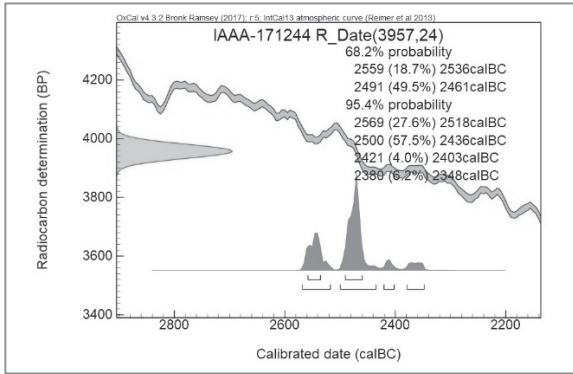
Warning! Date probably out of range

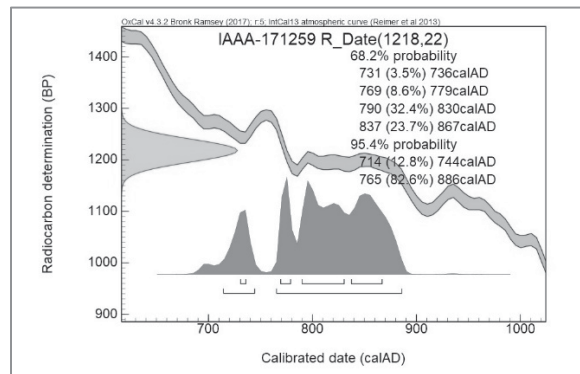
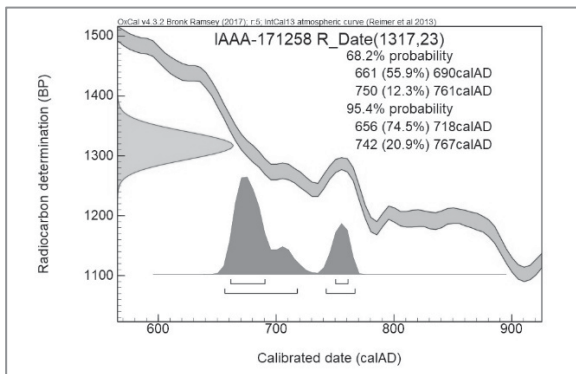
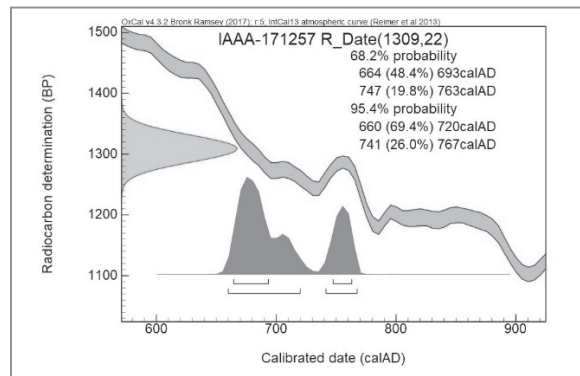
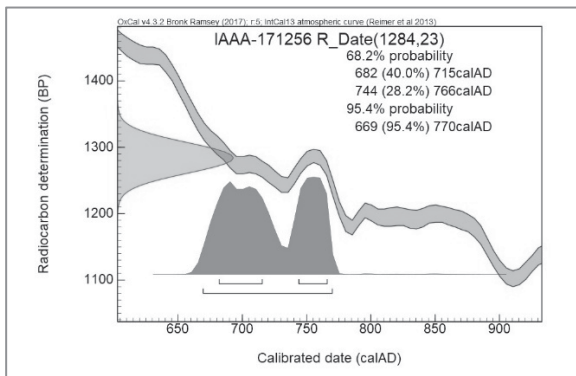
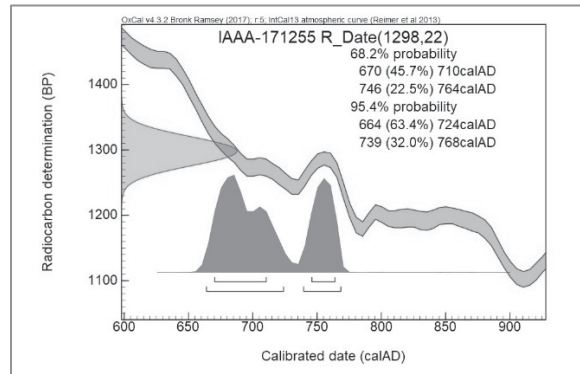
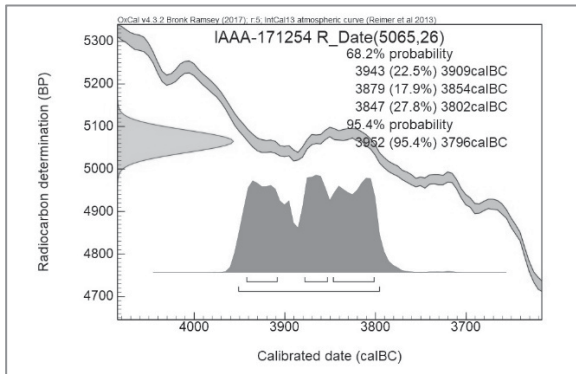
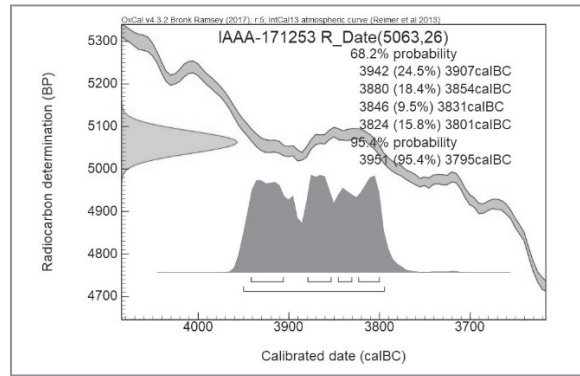
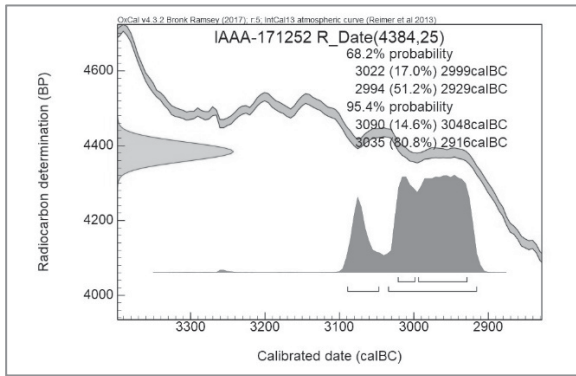
(この警告は較正プログラム OxCal が発するもので、試料の ^{14}C 年代に対応する較正年代が、当該暦年較正曲線で較正可能な範囲を超える新しい年代となる可能性があることを表す。)

文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360
- 小林謙一 2009 近畿地方以東の地域への拡散, 西本豊弘編, 新弥生時代のはじまり 第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代, 雄山閣, 55-82
- 小林達雄編 2008 総覧縄文土器, 総覧縄文土器刊行委員会, アム・プロモーション
- 中尾七重ほか 2015 近世日本産樹木年輪の炭素 14 年代—建築部材とのマッチング, 日本文化財科学会 第32回大会研究発表要旨集, 日本文化財科学会, 134-135
- 尾寄大真 2009 日本産樹木年輪試料の炭素 14 年代からみた弥生時代の実年代, 設楽博己, 藤尾慎一郎, 松木武彦編 弥生時代の考古学1 弥生文化の輪郭, 同成社, 225-235
- Reimer, P. J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55(4), 1869-1887
- 坂本稔 2010 較正曲線と日本産樹木—弥生から古墳へ—, 第5回年代測定と日本文化研究シンポジウム 予稿集, (株) 加速器分析研究所, 85-90
- 坂本稔ほか 2015 近世日本産樹木年輪の炭素 14 年代—較正曲線からの特徴的な乖離, 日本文化財科学会 第32回大会研究発表要旨集, 日本文化財科学会, 38-39
- 佐原眞 2005 日本考古学・日本歴史学の時代区分, 佐原眞, ウェルナー・シュタインハウス監修, 独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所編集, ドイツ展記念概説 日本の考古学 上巻, 学生社, 14-19
- Stuiver, M. and Polach, H. A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363







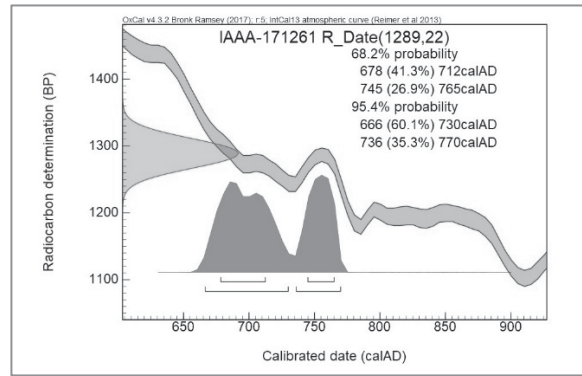
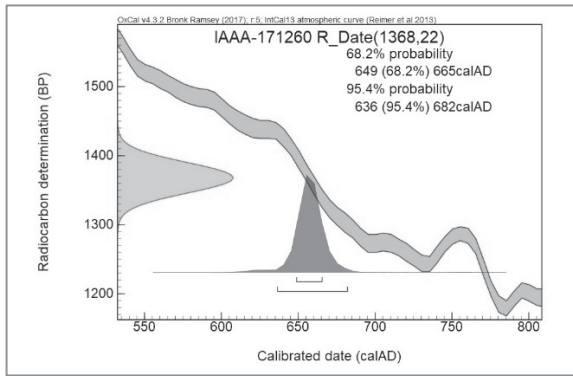


図 13 暦年較正年代グラフ (参考)

6 まとめ

本年度は、平泉野台地の東端にある最大の平場を調査した。『陸奥国骨寺村絵図』詳細絵図には、位置的にこの辺りとみられる部分に「骨寺（堂）跡」が描かれている。

平場の北東端に設けた1トレンチで確認した道路遺構は、両側側溝になるとみられる溝1・2とその間にある路面整地層よりなる。平場縁辺の地形に沿って東西に35m走り、東端で南に向きを変える。

遺物は出土していないが、路面整地層中から2次堆積によるものとみられる灰白色火山灰の小塊を確認し、火山灰分析を実施した結果、10世紀初頭に降灰した十和田aテフラに同定された。また、路面整地層中から出土した炭化物7点の放射性炭素年代測定（AMS法）を実施した結果、最も新しい年代を示した試料は12世紀頃のものであった。これらのことから、本遺構が構築されたのは、古くとも12世紀以降とみられる。

この道路遺構は現在の林道にほぼ沿っており、明治期に作られた地形図『岩手県陸中中国西磐井郡巖美村全圖』（個人蔵）でもこのあたりに道が描かれていることから、長く使われていた道とみられるが、その構築年代は中世前期にまで遡る可能性もある。今後、この道路遺構の延長方向を確認する必要がある。

道路遺構の西側、平場の中で最も標高が高い部分に設けた2～3トレンチでは、合わせて3棟の竪穴状遺構を確認した。これらは、建物である可能性がある。全体が確認出来たのは竪穴状遺構1だけであるが、一辺が4～6mの概ね方形になるとみられ、軸方向が近似していることから同時期に構築された可能性が高い。全てにおいて貼床層があり、ピットの多くは壁際にあり、カマドが確認出来たものはない。

遺物は竪穴状遺構1・3から合わせて3点の縄文土器が出土したのみであるが、遺構が掘り込まれている基本土層IV層中、および竪穴状遺構3の貼床層中から2次堆積によるものとみられる灰白色火山灰の小塊を確認した。火山灰分析を実施した結果、10世紀初頭に降灰した十和田aテフラに同定された。また、竪穴状遺構1・2の貼床層およびP11埋土中から出土した炭化物合計13点の放射性炭素年代測定（AMS法）を実施した結果、最も新しい年代を示した試料は8世紀のものであった。これらのことから、これらの遺構が構築されたのは、古くとも10世紀半ば以降とみられる。

竪穴建物は、11世紀頃からカマドがなくなり、柱穴が壁際にあるものが多くなるとされる（高橋2001）。本調査で確認された竪穴状遺構が竪穴建物であれば、構造上の特徴から11世紀以降のものである可能性がある。

本年度の調査で確認した道路遺構および竪穴状遺構は、ともに中世に構築された可能性がある。そして、『陸奥国骨寺村絵図』にある「骨寺（堂）跡」が実在するとすれば、この周辺にあるとみられる。「骨寺（堂）跡」とこれらの遺構との関わりを確認するため、さらに平泉野台地周辺の調査を継続する必要がある。

(二階堂)



岩手県陸中國西磐井郡巖美村全圖(個人蔵)

【参考文献】

- 伊藤信1957「辺境在家の成立—中尊寺領陸奥国骨寺村について—」『歴史』第15号 東北史学会.
- 大石直正1984「中尊寺領骨寺村の成立」『東北文化研究所紀要』第15号.
- 黒田日出男1995「陸奥國中尊寺領骨寺村との対話—描かれた東国の村と境相論—」『描かれた荘園の世界』
新人物往来社.
- 島田直明2012「Ⅲ. 骨寺村荘園遺跡の植生・植物相—特に丘陵地の植生」『骨寺村荘園遺跡村落調査研究自然関係調査業務報告書』骨寺村荘園遺跡自然調査研究班.
- 関根達人2009「北奥の一二世紀—堂ヶ平経塚の検討—」『平泉文化研究年報』第9号 岩手県教育委員会.
- 高橋與右衛門2001「古代型竪穴住居から中世型竪穴建物跡へ」『東北中世考古学叢書2 掘立と竪穴 中世遺構論の課題』東北中世考古学会 高志書院.
- 土井宣夫2012「Ⅱ. 地形地質」『骨寺村荘園遺跡村落調査研究自然関係調査業務報告書』骨寺村荘園遺跡自然調査研究班.
- 平塚明・島田直明・吉木岳哉・吉川昌伸2012「Ⅳ. 一関巖美町本寺地区岩井川左岸の旧河道における花粉分析」『骨寺村荘園遺跡村落調査研究自然関係調査業務報告書』骨寺村荘園遺跡自然調査研究班.
- 吉田敏弘2008『絵図と景観が語る 骨寺村の歴史～中世の風景が残る村とその魅力～』本の森.

No.	挿図	図版	地点・遺構名	層位	種類	器種	部位	年代	備考
1			3トレンチ	Ⅲ層	磁器	瓶	胴部	18C	肥前
2		21-2-2	3トレンチ	表土層	縄文土器	浅鉢	口縁部	縄文中期	撚り糸側面 圧痕
3	11-1	21-1-1	1トレンチ	表土層	石器	スクレイパー	完形	縄文	頁岩
4			1トレンチ	表土層	磁器	皿	口縁部	18C	肥前
5	11-5	21-2-4	3トレンチ	表土層	縄文土器	浅鉢	胴部	縄文晩期後葉	
6	11-4	21-1-2	3トレンチ	表土層	石器	敲石	完形	縄文	安山岩
7		21-2-3	3トレンチ	表土層	弥生土器	浅鉢	口縁部	弥生初頭	粘土粒貼付
8			3トレンチ	表土層	弥生土器?	不明	底部	弥生?	無文、土師 器の可能性 あり
9	11-3	21-2-1	3トレンチ中央部 南北サブトレンチ	Ⅳ層	石器	石匙	完形	縄文	頁岩
10	11-6	21-2-5	3トレンチ	Ⅳ層	弥生土器	浅鉢	口縁部	弥生初頭	
11			3トレンチ	Ⅳ層	石器	石核		縄文	頁岩
12	11-7	21-2-6	3トレンチ	表土層	縄文土器	深鉢	口縁部	縄文晩期中葉	口唇部に刻 目列、縄文
13			1トレンチ	表土層	石器	剥片		縄文	頁岩
14			1トレンチ	表土層	石器	石匙	上下部欠損	縄文	頁岩、未完 成品か
15		21-3-2	4トレンチ竪穴状 遺構3	上層	縄文土器	深鉢	底部	縄文中期	
16	11-2	21-3-1	4トレンチ	表土層	石器	スクレイパー	完形	縄文	頁岩
17			3トレンチ竪穴状 遺構1	上層	縄文土器	不明		縄文	
18			3トレンチ竪穴状 遺構1土坑1	上層	縄文土器	不明		縄文	

表5 出土遺物観察表



1 1 トレンチ道路遺構1 東端確認状況(東から)



2 1 トレンチ道路遺構1 東端確認状況(北東から)



1 1トレンチ溝1北東端屈曲部確認状況(東から)



2 1トレンチ溝1南東端断面(南から)



1 1トレンチ溝1 北東端屈曲部掘削状況(東から)



2 1トレンチ溝1 北東端屈曲部断面(北西から)



1 1トレンチ道路遺構1西端部確認状況(南東から)



2 1トレンチ道路遺構1図4-AA'(南東から)



1 1トレンチ道路遺構1図4-AA' (北東から)



2 1トレンチ図4-AA' 溝1断面



1 1トレンチ断面図4-AA' 溝2断面



2 1トレンチ道路遺構1路面整地層中火山灰



3 2トレンチ遺構確認状況(西から)



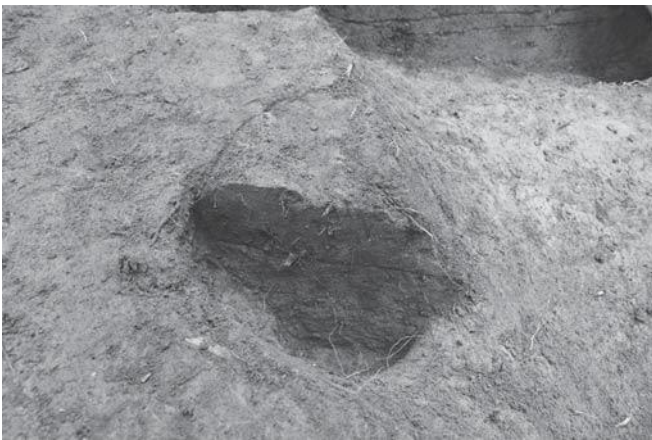
1 2トレンチ南端図5-AA' 南半



2 2トレンチ竪穴状遺構2半裁状況(東から)



1 2トレンチ縦穴状遺構2断面



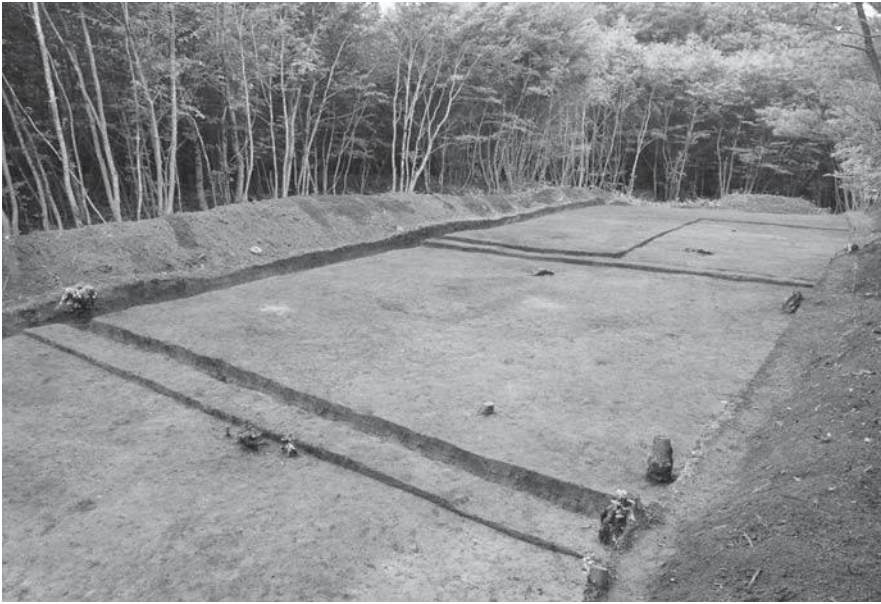
2 2トレンチP10半裁状況



3 2トレンチP11半裁状況



1 3トレンチ全景
(無人航空機による空中撮影)



1 3トレンチ遺構確認状況(北東から)



2 3トレンチ図7-CC'(北東から)



3 3トレンチ基本土層IV層中火山灰



1 3トレンチ縦穴状遺構1全景(無人航空機による空中撮影)



2 3トレンチ縦穴状遺構1全景(南東から)



1 3トレンチ縦穴状遺構1 全景(北西から)



2 3トレンチ縦穴状遺構1 図8-AA' (西から)



1 3トレンチ縦穴状遺構1 図8-BB' (南西から)



2 3トレンチ縦穴状遺構1 図8-CC' 北半(南西から)



1 3トレンチ縦穴状遺構1 図8-CC' 南半(南西から)



2 3トレンチ縦穴状遺構1 図8-CC' 土坑1



3 3トレンチ縦穴状遺構1 土坑1 断面



4 3トレンチ縦穴状遺構1 P1 半裁状況



5 3トレンチ縦穴状遺構1 P2 半裁状況



1 3トレンチ竪穴状遺構1 P 3 半裁状況



2 3トレンチ竪穴状遺構1 P 4 断面



3 3トレンチ竪穴状遺構1 P 5 断面



4 3トレンチ竪穴状遺構1 P 6 と地床炉



5 3トレンチ竪穴状遺構1 P 6 断面



6 3トレンチ竪穴状遺構1 P 7 半裁状況



7 3トレンチ竪穴状遺構1 P 8 断面



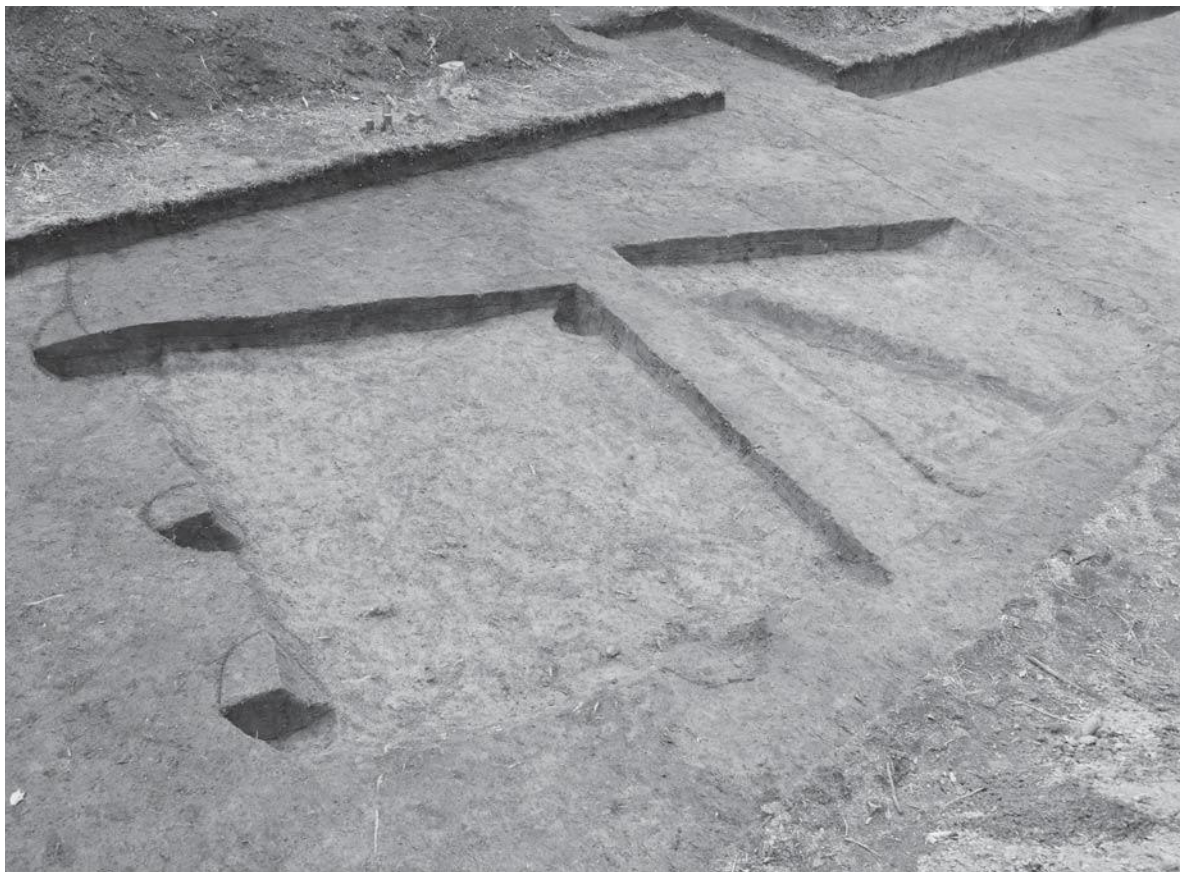
8 3トレンチ竪穴状遺構1 P 9 半裁状況



1 4トレンチ図9-AA' (南東から)



2 4トレンチ西壁



1 4トレンチ竪穴状遺構3全景(南東から)



2 4トレンチ竪穴状遺構3南東部(東から)



1 4トレンチ 縦穴状遺構3 P12~16(東から)



2 4トレンチ 縦穴状遺構3 図AA' 南半



1 4トレンチ竪穴状遺構3図10-B B' 北半



2 4トレンチ竪穴状遺構3図10-C C' 東半



1 4トレンチ縦穴状遺構3貼床層中火山灰



2 4トレンチ縦穴状遺構3 P12断面



3 4トレンチ縦穴状遺構3 P13断面



4 4トレンチ縦穴状遺構3 P14断面



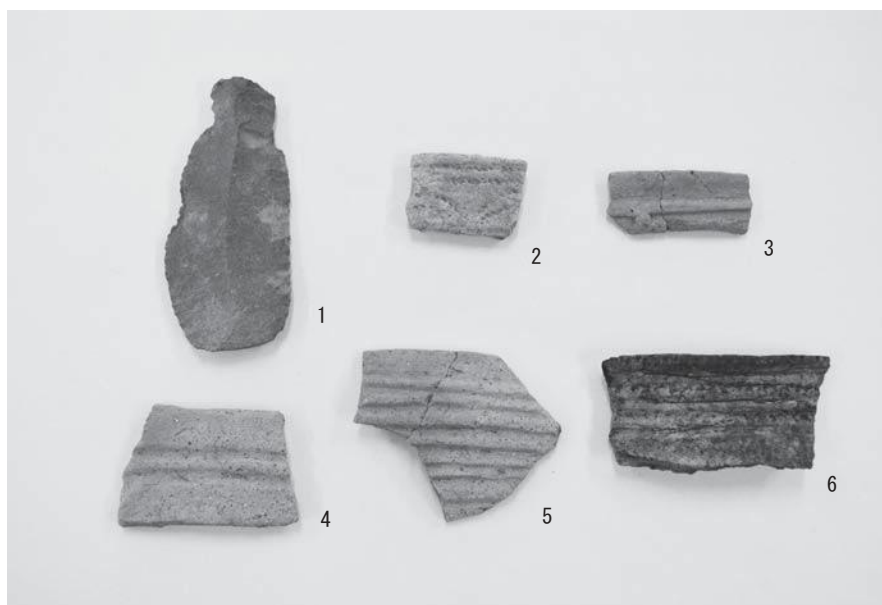
5 4トレンチ縦穴状遺構3 P15断面



6 4トレンチ縦穴状遺構3 P16断面



1 1トレンチ出土遺物



2 3トレンチ出土遺物



3 4トレンチ出土遺物

抄 録

ふりがな	ほねでらむらしょうえんいせきかくにんちょうさほうこくしょ							
書名	骨寺村荘園遺跡確認調査報告書							
副書名	平泉野遺跡							
巻次								
シリーズ名	岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第24集							
編著者名	菅原孝明・二階堂里絵							
編集機関	一関市教育委員会							
所在地	〒021-8503 一関市竹山町7-5 TEL 0191-26-0820							
発行年月日	2018年3月23日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいせんの 平泉野	いちのせきしげんびちよ うあざなかがわ、あざわ かいはら 一関市巖美町字中 川、字若井原	03209	NE72 -2197	38°58'43"	140°56'21"	20170612 ～ 20171019	446m ²	遺跡確認 調査
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平泉野	散布地	縄文 近世	掘立柱建物 竪穴状遺構 柱穴 土坑 道路	縄文土器 磁器		本調査で確認した遺構は、道路遺構と竪穴状遺構である。自然科学分析の結果から、道路遺構は12世紀以降、竪穴状遺構は10世紀以降にそれぞれ構築されたとみられる。		

岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第24集

骨寺村莊園遺跡確認調査報告書

平泉野遺跡

発行 平成30年3月23日

発行・編集 一関市教育委員会
〒021-8503
岩手県一関市竹山町7-5
電話 (0191) 26-0820

印刷 川嶋印刷株式会社
〒029-4194
岩手県西磐井郡平泉町平泉字佐野原21
電話 (0191) 46-4161(代)

